

N24
930

幼児の教育



お茶の水女子大学図書

和	昭 49	83755
---	---------	-------

1

第七十三卷 第一号 日本幼稚園協会

幼児教育界をリードする新書判シリーズ

フレーベル新書

B6変形版 平均180頁 丁80円

① リナはどうやって
文字を覚えたか

フリードリヒ・W・フレーベル著 莊司雅子訳
380円

② 保育者への一つの指針

平井信義・乾 孝・金沢嘉市・城戸幡太郎・
八杉龍一共著
470円

③ 対談 しごとと生きがい

〈聞き手〉多湖 輝

470円

④ 楽しい遊び〈室内・園庭編〉

日本児童遊戯研究所編
有木昭久・湯浅清四郎共著
350円

⑤ 楽しい遊び 〈伝承遊戯編〉

日本児童遊戯研究所編
有木昭久・湯浅清四郎共著
350円

⑥ 楽しい遊び 〈園外編〉

日本児童遊戯研究所編
有木昭久・湯浅清四郎共著
350円

⑦ 自然物のおもちや

滝田要吉著
380円

⑧ 私の幼児教育論

三木安正著
420円

(以下続刊)

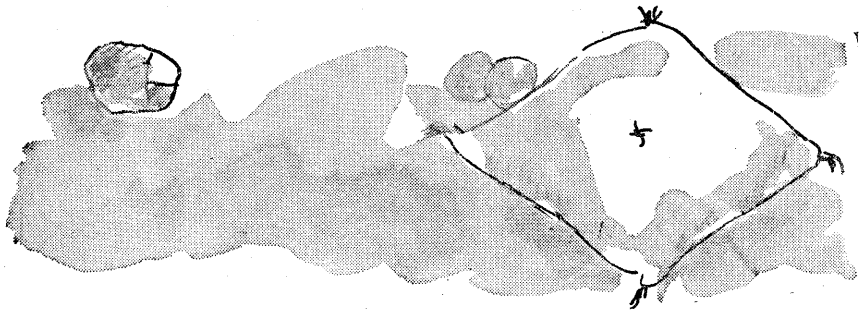


フレーベル館

幼児の教育

第七十三卷 第一号





幼児の教育 目次

——第七十三卷 一月号——

©1974
日本幼稚園協会

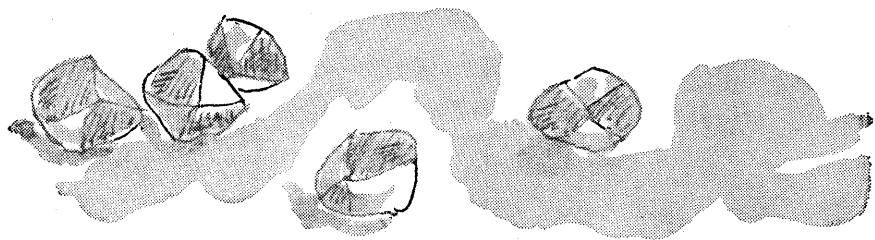
表紙 司 修
カッタ 中島 英子

生命のリズム……………千谷 七郎…(4)

★座談会

新年を迎えて したいこと……………井上のりえ 川村 礼子…(8)
 いたいこと 大崎利恵子 別役富美子
 大多和 檀 前田 陽子
 河井祥子 松井とし

家なき幼稚園のこと……………萩 尾 藤 江…(25)



私の保育……………島田ななみ…(28)

子どもの生きがい……………立川多恵子…(32)

幼児教育の源流 (X)

マリア・モンテッソーリ (上) ……利島知可子…(36)

幼児の家庭生活と音楽リズム……………清水美代子…(48)

ニューヨークからインドへ……………石島襄二…(61)

編集委員 勝部真長・守永英子

関 治子・本田和子

編集主任 津守 真・赤間峰子

生命のリズム

去る十月二日と五日に行なわれた伊勢神宮の内宮の遷宮の秘儀の折、私には七年前ギリシアを数日の間訪れた時の感慨が蘇って来た。

夏の暑い盛りであったが、空には連日一片の雲もなかった。ホーマーの舞台となったミュケーネのアガメン王の古跡はさりながら、アクロポリスの丘に立つバルテノン、抜けるような紺青の空と波一つなくすぎ通った海に包まれ、夕日に浮かぶ岬シュニオンの海神ポセイドン神殿、白銀色に輝くバルナソスの懸崖を屏風にして、やがてなだらかな広漠たる麓高原に移ろうとする山腹に、脚下遠くの彼方にイテア湾の水平線を望見するデルフィのアポロの神域、そしてそこに残るオリブの森に囲まれた半円劇場の遺跡に立てば、ソクラテス其の他ソフィストたち小理窟屋の輩出時代をはるかに越えて、人の心を遠い、神々すら運命の前にひ

千 谷 七 郎



れ伏した神話時代に運んで、この澄み切って明るいギリシアの地にありながら、不思議と幽愁の氣に包むものがあつた。その時、十数人の観光客の一団の中のただ一人の日本人であつた私は、ふとわれに帰って見れば、いつの間にか胸に伊勢神宮の影をいだいて東西を比較しながら、古代人の心に浸っていた。

確かにここギリシアの聖地は、風土と人間の心とが真に一体となつて、人々は万象を悉く生命と感じて、神々を擬人化するこゝとなど始めていなかった太古の氣を今なおただよわせ、実にすばらしい。がしかし、今はやはり廃墟だ、という思いを禁じえなかつた。そう思うと、途中のバスで横切つたミノロンギの野、一八二四年四月十九日ギリシア独立戦争にはせ参じた詩人バイロンが散華したあの古戦場の荒涼も、何か寂寞を添えるものになつた。あの時老ゲーテがジェノアから一青年に托されて届いたバイロン

の手紙からその意図に気がついて、時を移さず一聯の詩に托して壯図を引き止めようとしたが、遂に若者の血気には及ばなかった。それにしてもバイロンをして生命を捧げしめたこのギリシヤがどうして亡びたのであろうか。思ひは遠く歴史の跡をたどろうとしたが、そのときそれらを掻き消してせきを切るかのようにこみ上げて来たのは、シラーの哲学詩「ギリシヤの神々」であった。

かの花、悉く散り果てぬ

すさまじき朔風に払はれて、

万よろずの中の一つ神を肥えしむと

この世の神々枯れ朽ちつ。

だが、花を塵埃に踏みじつて、わが身が肥えたと思ひ込んだこの唯一神とは、ヨーロッパのある宗教の唯一最高神もさりながら、所詮は計算を知った独立意志の担い手である人間であることと思えば、神々の去つたのも他人事とは思われず、慄然とする襟元に新しく、今なお生きつづけている伊勢神宮の東風が大地のかおりを運ぶのか、何か全身に不思議な力がしみわたるのを覚えた。それはただ異境に遊ぶ孤客の感傷であったとは、今日も思わない。一行の外人客の誰がこのような思ひをもつただらうか。

それから二年後の中秋、私は向うでお世話になったスイスの老神経学者を日本に迎えたとき伊勢神宮に案内した。五十鈴川の岸辺に立った彼は一言二言ぼつりと語った。「今日ではヨーロッパ

から日本まで二日あれば足りる。一日ここ伊勢神宮を訪れて帰ればよい。現代ヨーロッパ人にとって最高の精神療法が与えられるだろう」それに加えて、「この神宮が無くなるとき、それは日本民族の亡びるときだろう」とも言った。彼も私がかつてギリシヤで感じたのと同じ感慨にひき込まれたものと思う。一時間有余の参詣の間、時折りの嘆声のほかほとんど口をきかなかつた彼が帰国後に著した『日本の印象』の中で、伊勢を語る数ページは最も精彩を放っている個所である。

さて、遷宮は灯を消して夜の暗闇に運ばれる秘儀で、二十年毎に更新されるという。私は神道の門外漢であるけれども、この暗闇と二十年の更新との二つに、生命の神秘の最高の象徴を見る。

胎児は子宮の暗闇の中で、目も見えず、耳も聞こえず、要するに五感の中で、むしろ意識もなく、あの不思議な発育を経て生まれ出る。明るく、意識のあるところではこの生の神秘は行なわれない。この暗闇は他の何ものにもたとえられないだろう。人間の意識を越えた暗闇の神秘というよりない。詩人のみがわずかにそれを示唆しうるだけであらう。月のない旧曆三十日の闇に外宮に詣でた芭蕉の一句

みそか月なし千とせの杉を抱かかあらし

は、本当に人の「深き心」を引き起こす。

ところで子宮内でたどる胎児の道も、その親またその親たちが

いつの昔からか経てきた過程の繰り返しである。このように、類似のことが類似の期間に繰り返されることをリズムという。遷宮という二十年毎の更新は人類の世代交代のリズムを端的に示すからこそ、私どもを常に生命の神秘に誘う。そこでもう少し精密に生命のリズムを考えて見たい。

人間や多くの動物に見られる睡眠と覚醒との交替は昼夜の交替と一致するが、人間より遙かに下層で生をいとなみつづける植物界の生のメロディーも、この昼夜のリズムに従う。昼夜のリズムと言えば、言うまでもなく太陽を周って黄道を運行する地球の自転リズムの現われである。そして植物だけが成長、開花、結果という四季の輪航について行くのではなく、人間もそうである。身長や胸囲増大の進行期と退行期、睡眠の持続と深さとの年内リズム、気分変動の季節的リズムなども見られる。大まかな統計によれば妊娠と風俗犯罪と自殺とが同じ季節的変動を示す。爬虫類や両棲類の脱皮、鳥類の換毛、哺乳動物の毛替り、渡り鳥の長距離飛翔、各種のいわゆる冬眠、発情期と妊娠期と出産期、鮭や鱒や鯉の移住、蜻蛉とんぼや蝶の巢立ちの時期、それらすべてや、その他無数の多くが宇宙のリズムにはめこまれているのが見られる。そして太陽のリズムに月のリズムが交錯する。このことよって太古の知恵や、今日多くの未開民族にも見いだされる信仰の真実性が幾つかの点で確かめられている。たとえば、満月直前に伐採された

樹木は、新月直前に伐採されたものよりも樹液が多過ぎて腐れやすいということもあるという。さらに月リズムとの関係で科学的に証明された海棲下等動物の有名な例なども少なくない。

このようにリズムの偉大な交響楽を思い、たどる人であれば、個体生命の推移と宇宙の推移とが一つのリズムの全体の中で、対極的に相応している諸形態であると見なければならぬと、やがて感じるようになるだろう。したがって、この一つのリズムの全体は、たとい無機的であるとは言え、生きていることになる。ともかくも私どもの住む地球は不断の搏動を示している。雪解けのリズムの時期、河川の水量増減の季節的リズム、地下水の深さの周期的変動、気圧や気温、湿度や電気伝導度などの日周期、地磁気の偏角や伏角の日、年、および百年の周期、極光・月、半年、および一年の周期、無風帯の周期的変動など思い浮かべて見られるといい。さらに砂漠に見られる三日月砂丘、砂丘の風紋、鱗雲、山や山脈の波状などの形態に見られるリズムも見られよう。

このように人間、動物、植物の諸生命、それに無機的な自然界のすべてを含めて、「一つ息吹き、一つ流れにものみな感じ合ふ」ことが知られてくるだろう。さらに生殖というのは、たとえば人間なら人間という属の形態（物質、おもかげ）が世代から世代へと、類似の形象が類似の期間内に繰り返されるリズム的推移であることに着目するなら、どんなにリズムが生命の根源現象である

かが証明されるだろう。そしてリズムは去ると来るとの、すなわち去來の交替にあるから、同じことは二度と来ない。ただ類似の現象が類似の期間をおいて交替的に去來するのみである。

さて、現実というのは生起する現象であるから、現象の空間性は不斷に變移せざるをえない。したがって、生きている、と前に述べた宇宙の中では、空間と時間とは、ちょうど肉体と心の關係になる。肉体は心の現象であり、心は肉体の意こころであるから、現実空間は現実時間の現象であり、時間は空間の心ということになる。

しかし心の現われはすべてリズム的推移を示すから、リズムの本質を解く鍵であると前に述べた去來の交替は、時間自身に固有するものということになるだろう。したがってリズムの意味の根拠は、ただ物尺、直線的分秒しか知らない物理学者には神話的に響くかも知れないけれど、現実時間の脈うつ歩みにあると言えるだろう。したがって個体の心は、それがリズムとして羽ばたくとき、どんなに短い刹那であろうとも、生起の兩極である空間と時間とを結ぶそのもの、すなわち、生成と消滅との永遠性そのものである。李白はこのことを詠う。

天地者万物之逆旅びやくりよ

光陰者百代之過客

天地は万物の宿る宿屋であつて、たちまちに過ぎて行く、天地は森羅万象の現象空間である。また光陰（時間）は永遠に休むこ

となくこの天地を過ぎて行く旅人である。万物が旅人の姿であれば、旅人は万物の心である。

芭蕉が奥の細道の冒頭に引いて「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也」と言いかえているが、李白の前句の影がやや薄れて、時の無常性の側面がより大きく強調されているのは、捨身無常に行脚する詩人にふさわしい。

さもあれ、この生命のリズムの充実こそ、人間形成の根源、したがって生き甲斐の根差すところであり、このリズムの破壊が人間の意志のあせりであることに十分思いをいたさなくてはならないであろう。母性本能は最も安んじて預けられる手綱である。

蓬萊に聞かばや伊勢の初太鼓 芭蕉

（東京女子医科大学）

*

*

新年を迎えて したいこと
いいたいこと

— われら 20 代 —



え子 檀子 子子 子子 子子
り恵 祥礼 美陽 と
の利和 祥礼 富陽 と
上崎 和多 井村 役田 井
井大 大河 川別 前松

(アイウエオ順)

A 今日のテーマは一応「新年を迎えてしたいこと、いいたいこと」だそうですけれど、あまりそれにこだわらずに、どなたか口火を切ってどうぞ……。

久しぶりにお会いした、というところで B さん、どうでしょうか？ お若くてビチビチしていらっしゃるようだし……。(笑い)

B 私は今、公立の幼稚園に勤めてますけれど、勤め始めてしまうと忙しいっていうこともあるけれど、学校のことなんかどこかへとんじやったような気がします。もちろん現場で、学生時代に習ったこともうんと生きているとは思うんですけれどね。

何か、人間関係にしても、実際に子どもはどういうものかっていうことも、私は自分でクラスをもってみながら「初めて」というようなことばかりで、あっという間に今、六年目なんです。区の中では中堅どころぐらいなんです。ああ、

ここまできちゃったか、なんて思つて…

C 本当！　ここまできちゃったか、よね。

保育者一年生の悩み

A 幼稚園の先生たちつて、いいこととか、したいことがあつて、子どもが片方について、自分は真中にいる。また職場の人間関係とか、幼稚園の教育に関する主義主張とかがある中で、本当にどういうところを“ここだ”と思つて拾ひ出して進めていくのかしら。

C “これだけは”みたいなもの？

A それほど強くなくても、幼稚園の先生とか、幼稚園とかつていうことをぬいて、いいこととかかしたいこと、はありませんか。きつと、分離しきれずに入つてくると思いますけれど…。

D 困っちゃう、運動会も終わったし…。

A 割と、満足して毎日すごしてるわけ？

D 満足してつて…。それは、いいこととか、したいことつてあるでしょ。でも入った当時は同じ職場の方たちのこと、わからなかったわけ、お互いに。それに児童学科つていうのは割合に社会に出ると肩身がせまいつていうあれが何となくあつたでしょ？　だから、こう、いいたいことがわかつてもらいにくいんじゃないかつていう先入観があつたの。それとか、うちの幼稚園では他の幼稚園ではとらないような子どもがいたり、そういう問題もぶつかつてきたりして、始めの内は二人だけでかたよつていたわけ。だけど半年たつて今はいいたいこともいえて、やろうと思えばこっちの気持ち次第でどうにかなるつていう感じがあるから、その辺のところでは大分気が楽になつたつていうところなの。

だけど、いい方つていうのはむずかし

いなあつていうことはこのごろ感じてるの。学生の時は、いいたいことをボンボンボンボンまっすぐいつてもうけとめてくれて、相手もわかるうとしてくれたつていうのがあつたけれど、今は、同僚に對しても、園長とか、お母さんたちに對してもそうだけど、いい方一つですごくあとの話の進み方が違つていうそれは感じているの。でも、いいたいこと、やりたいことつていうのは出せばどうにかなるし、また次が開けてくるんじゃないかつて、大分楽になつたと思つてます。

A そういうのをのりこえるところのプロセスでは、こうしてのりこえたつていうのがあるわけ？

E 私はまだのりこえてないけれど…のりこえきれなくてもね、私は私でしょ？　そういういい方、変かもしれないけれど、今まで一学期はとも苦しかったわけ。で…もうだめだ、とか思つたことが今は楽になつたの。それは

どうしてかって考えてみると何ていうのかしら、自分の私的な生活と幼稚園の生活を切りはなしてた自分があった、そうするとおかしなことになってたような気がする。

A そこ、大事じゃない？

C 切りはなすと苦しかったの？

E 切りはなしてたみたいなのね。そこんとこちょっと整理ができてないんだけれど……。

C たとえば、こうしなきゃ、とか、

こうあるべきとか……。

E う……ん、幼稚園で生きられなかったわけ、要するに。

C そうか、今のいい方すごいわかった！

E 今は、私は、相当程度、生きられるっていう実感があるからいられるの。そうするといろんなものが変わってきて自分の中でも変わってくるから……。

A 「わかるわーって」いうのが、私

あんまりわからない。(笑い)

C だからね、Eさんが、そこで自分が生きられるっていうのは、今まではその職場で緊張っていうのかな、今までの自分の生活とは全然違うし、子どもたちは受けもってるし、先生たちとの新しい人間関係は出てきてるし、その中で何か、自分が出せてないっていうのか、自分らしさでもっていられるんじゃないか。その分、だんだんと自分が、ありのままとまでいなくても、わりと自分らしくいられる、気安くいられるっていう、そんな感じじゃないかな。

E 気安くいられるから、苦しくてもその苦しさが充実したものになってくるっていう感じ。めいっても、めいり方が違ってくるっていうような……。

A 違ってくるって、言葉で「スッ」といつちゃうけど、何かありそうね。

F 私はね、子どもが幼稚園にくるのを楽しみにするでしょ、幼稚園に行くこと

たのしいから幼稚園に行きたいっていう感じ。それは私たちも同じで、幼稚園という職場を選んだのが、使命感をもったからとか、せねばならぬ、じゃなくて、子どもたちが好きで、自分が幼児教育を選んだんだから、毎日子どもたちと同じように、今日はどうやって生活しようかしらっていう楽しさをもって幼稚園に行きたいと思うわけね。

ところが、子どもと私の生活だけが幼稚園にあるわけじゃなくて、大人との交渉の生活が半分以上あるわけなのね。そうすると、そこにはいたくない、けど子どもとの生活、担任になってしまったところの責任、があるわけでしょ。だから、朝どういう気持ちになるかっていうと『ああ行かなくっちゃ』っていうことになる。(笑い)

だけど、行かなくちゃっていう気持ちじゃなくて、大人との関係も楽しくなると午前も午後も楽しくなると、今日は何

しようかなという子どもが楽しみにして幼稚園へ行くのと同じ気持ちになる。そこに、楽しい幼稚園生活っていうのが生まれてくるんじゃないかしら、そうすると、ああ今日はっていう楽しい気持ちで朝出かけられるっていうように、何か一つ変わってきた時に、全部が楽しい方向に変わっていくでしょ？

本当は、自分の生活と幼稚園の生活っていうのは、輪になって回転するわけじゃない？　ところが、分離したいっていう変な精神状態になった時はものすごくアンバランスなわけよ。だから、自分の生活は逃避になっちゃうわけね。でも、そうじゃないっていう状態も、そうであるっていう状態も両方経験してきたから、よくわかるっていうことなの。

G 私なんか聞いてて、ああ、年齢の違いがなくなって感じる。(笑い)

やっぱり幼稚園生活の経験の違い、それは必ずあるのよね。実際の幼稚園とい

うリズムと、自分の考えていた幼稚園というものと違うでしょ？　それが生活している内に、どっちが変わったっていうんじゃないくて、一つのものになっていったらいいでしょう。それが五年くらいたつと非常にマンネリになっちゃうわけ、そして、今度はどうしてそこから自分が逃げ出そうかっていうことを逆に考えちゃうの。私なんか五年目で職場を変わってまた最初からやり直して、最初はいろんなことがあって、それが、ああこんなものかな、でだんだんいやになっちゃうの。どうにかして自分が変わっていかなくちゃならないと思う、そういう何かこう、そこの中にいる年数、それによっても違うかなと思うんですけれど……。

A 一緒にはなれない、その生活の中から自分っていうものをとり出してみたい……みる、感じていうのがあるわよね。

幼稚園の生活って、そこで子どもと出

会っていれば、生き生きとされるでしょうけれど、一体になるっていう時期をへて、一体になっちゃうと、それがマンネリとかそういうことに見えてきて、今度は自分をそこからとり出してみようとか、つまり、自分っていうものがうんと出てくるっていうようなことかしら……。

私はどうやってきたか

A Hさんはいかがですか？

H ええ、やっぱりぬけ出すまでに一年ぐらいかかりました。つまり自分じゃなかったわけ、一年ぐらいは、そしてやっぱり、悟るっていうとおかしいけど、もうしょうがないなあと思って、これでするよりしょうがないと思いました。

そしてやり始めて、一年目のしょうがないと思ってやってた時は、何もまわりがよくならなかったの。だから、子どもと私の生活があった、他の先生と私の生活があった、で、さし障りのない部分だ

け通じ合っていて、かんじんな部分は全然通じ合っていないくて、そのかんじんな部分は自分流にやっていたわけ、そして一年ぐらゐ悶々としながらやって、二年目で開き直って、……ここは大事だなあと思ったらしよがないから、傷つけまいとしながら婉曲に婉曲に話して、そしてある時は自分で強引にやっちゃって、そして認めてもらうようなやり方をしてきたの。

今は、こう、何ていうかどこかに遠慮しているところはあるけれど、まあ、いたいことはいえるようになってきて、ちょうどGさんと同じように、ごちゃごちゃしてきて、今度は、何とか自分が出たい、出れば、出て戻ってくればごちゃごちゃした部分が変わってくるんじゃないかなってという期待をもってるんです。

C でもその戻るっていうのは保育の方に戻るっていうこと？ 出ちゃったばなしじゃなくて、やっぱり最後には戻る

っていう……。

H ええ、だからやっぱり、本当に分離はできないけれど、何となく出れば何か違うものが得られるんじゃないかっていう、そんな気持ちです。

A やっぱり戻る、っていうことはどう？

C 私、二年目ぐらゐの時ね、いやでいやで、幼稚園なんかもういやだ、って思ってた大体私と同期の人もそうだったの。顔合わせると、求人欄を見てるっていうの。(笑い)

三年目ってよくいうけれど、三年目にはあまり感じなくて、四年目、五年目ぐらゐの時、何か、いやだないやだな、違うことしたいなっていう感じがして、本当に自分は保育に向いてるんだらうか、もっと違うことをやった方が自分が生き生きするんじゃないかって思い出したわけね。

それで、夏休みなんかには、思い切っ

て全然違うことをしてみたり、それから何が自分の中で問題としていいかもわからなくてね。たとえば保育の集りなんかに行つて、問題点を出しましようなんていうと、"私は今こういうことで悩んでいます"なんて深刻な顔をしていってる人を見てもちっともそういうふうになれないわけね、そうすると、自分がやっていることがそれでいいみたいに見えるやうけど、自分の中では、それがいいとも思えないわけ。かといってそんなふうに、深刻に悩むところもないっていうのは、少し自分がおかしいのではないかみたいにして、友だちとあうと違うことをやりたいなんて話しあっていたのね。

そういう時期、何もやる気のない時に現職研究会があったわけ、たまたま。それはどういうわけか素直に行く気がしたので一年間やって、あのころは、それだけがつながつているくさりみただった。あのころとどうして変わっちゃったんだろ

うと思うんだけど、何か少しずつ自分の中に、もう私が入って行く道はこれしかないんじゃないだろうか、というふうになってきつつあるみたいな感じなの。

それは特に、今度夏休みが終わって子どもたちと会うでしょ？ その時すごく思ったの。夏休み中、ともかく私なんて本当に子どものことなんて忘れちゃってたし……。年少児でしょ？ 九月一日に大掃除で、何人かのお母さんが手伝いに来て、子どもを連れて来てるのに、何かとっさに名前が出て来ないの。(笑い)もうどうしようか、名簿をみなくちゃだめだなんていうほど……。 (笑い)

それぐらいなのに、その翌々日が始業式で、子どもたちと会っていると、やっぱり、いいなあ！ と思うものがあるわけね。その子たちと自分との間に……。だから、夏休み中はきれいに忘れていたけれど、何かはなれがたいっていうか、今はこれで定着していくんじゃないかっ

て思うの。

A ひところ、同級生のグループで話しあった時、みんな、お花やさんをしたとか、ケーキを作ることにこつてみた、何か職業を変えたっていうことが、すごくあったわね。遠い将来でまた戻るっていうことはあるかもしれないけれど、何もずっとこのまま続けなきゃいけないことはないなんて話し合つて……。でも何となくこう子どもと一緒にいると、一方には憧れとかありながら、やらなきゃっていうんでやってる時期があるみたいね。でもそれを救ってる夏休みとか、やっぱりあるわけね。

C 夏休みがなかったらやれないわね。あれがあるから私たち生き生きできるのよ。私、一年目なんか、夏休み前はばててもうだめだーなんて思つてたでしょ？ それで夏休みが終わつたとたんによろしく生き生きしちゃつて、子どもたちとも元氣よく遊んじゃつてね。だからも

う、夏休みっていうのは先生にとって絶対必要だなんて物すごく感じた。

自分としてしたいこと

A ここまで進んできたところで、保育者として今こういう話をしている人たちが、「自分として何がしたい」というのが出てきたらおもしろいと思うんだけど、さっきちょっとお話ししたHさん、どうぞ。

H 性格的に、夏休みに子どもの名前なんかきれいさっぱりと忘れられる人と、逆にやっぱり忘れられない、長い夏休みをもてあますっていう人がいるわけです。私なんかどっちかっていうと、好きなことをしていても、何となくあ早く幼稚園が始まらないかかっていう気分になるのね。(「えらいい」) そんなえらいとか何とかいうんじゃないで、何となく落ちつかないのね。そうするとやっぱり、自分が生き生きとする生活を見つ

けられたらいい、何かこう、自分が生き生きとしたものを出せれば、子どもと会っている時に向うも生き生きとしたものを出してくるんじゃないかと思うの。だから、自分を忘れて夢中になれるものがほしいなって探してるところなんです。

A 今、探してるところ？

H 今は……そうね、冬はスキーのシーズンでしょ？ だから早く雪が降っていい山が見たいなあっていう感じ、いい景色見て一生懸命滑ってって思ってるの。

何か、こんなことじゃ悲しいななんて思ったりもするんだけれどね。何かもって生き生きとさせるものがでてきてもいいんじゃないのかなあって……。 (一同ウーン)

A そうなのよ。前は、ちょっと旅行すると本当に無邪気に楽しめて、生き生きできて、何か物を習って、自分が変わ

っていくのが楽しかったりしたの。でも今はもう、そういうのも憶くうっていか……。私も今探してるという状態なの。一体何なのかって。

G 私なんてどっちかっていうと、何かを見つけない見つけないっていいながら、幼稚園っていうものの中にひたりきっちゃってるでしょ。で、ある程度満足しちゃう、満足っていうのかしら……何となく毎日が楽しいわけよ、子どもの中にいれば。だから、離れたい離れたいと思いながら、ふみきれない、そういう自分を、また知ってるでしょ？ だからそれがいやなのね。一生懸命自分を自分でひっぱることができないのね。そういうことができる人だったらいいと思うの。

C でも、自分の生活っていうものがあるでしょ？ 学生の時はそういうものがないから、どこでもほいほい変わることかができると思うの。ところがある程度職業について収入を得ると、今度それが

なくなる生活はすごくきびしいなと思うわけね。そうするとすぐにはい、なんて変われない、やっぱり私はその辺のことがあると思うんだけれど……。

G そういうことじゃなくて、現在俸給をもらってるから……そして何となく減私奉公みたいなのにそこに対してつくさなきゃならないんじゃないか、という気持ち、それこそ夏休みでもそういうことがいつも頭にあるから、だからこういうふうになっちゃうんじゃないかしら。(かえらいなし)

C たとえばね、違うやりたいことがあったとして花やさんへいったとすると、そうすると、今はきびしくとも給料をもらってる、それがゼロになって、ゼロからやらなければならぬわけでしょ？ やっぱしそこまで勇氣というか、自分を動かせたらいいなって出たけれど、その、今の生活を変えるってことが、こわいっていいのか、そういうのが私はある

の。

A 何かやっぱり年齢的なものもあるんじゃない？ もうここまできちゃって、生活をしてきちゃってるわけでしょ？

これがもう少し若かったら、やり直しも出直しもきくって感じがするけれど……。

C ウア!! 若かったら、なんて、よくいうー。

H 安定してるっていうんじゃないかしら、経済的にも精神的にも……。

G 私なんて逆に、ゼロになったらどんなにいいだろうと思う。

C いいだろうと思いつつできないの。やれる？ できないわ。私、やりたいたいと思っても……。

F それか、収入に魅力があるのか、幼稚園の生活に魅力があるのかっていうことはわからないと思うの。もし花やさんをしてもうかったら幼稚園の先生の収入なんか比べものにならないくらい、う

んともうかるわけでしょ？ (笑い) 幼稚園は一定なわけじゃない？

だから、その収入に魅力っていうか、

幼稚園の生活はもういやだと思ふことが年中あっても、その逆の楽しさもあるわけじゃない？ 私も夏休みは徹底して遊ぶ方だから本当に夜半まで遊ぶわけ。ふ

だんは睡眠をとることを考えたり、朝早いからっていちいち考えちゃうでしょ。でも夏休みは一切ないから……そういう生活に切りかえちゃうわけ。そして今度

九月になった時、また切りかわった時、子どもと出会った時の何ともいえないうれしさとか楽しさ、それが何かすてき

なものがあると思うんです。

A でも、夏休みは遊んで、ふだんの生活とはガラッと変えて、っていつても、どこまで切り離せてるのかなって考えたことない？

F でもね、ふだんの生活っていうのは朝の八時から夕方の四時まで拘束され

てて、仕事の量は実際問題としてその時間じゃすまないほどあって、どうしても六時ごろまで仕事をしなきゃならないっていう、そういう生活でしょ？ でも夏

休みっていうのは全部自宅研修で、一週間なら一週間でどういうふうに使ってもいいわけよ。その間何か違う仕事をして

も、たとえばいけないことだけれど何かアルバイトか何かしてもいいわけじゃない？ やってみる、ということでは。だから全然違う生活ができると思うの。

A そこが全然違わないんじゃないかって……。

C あるの、“幼稚園の先生” っていうものの上にあるから。

A そこがね、変われたら、ご立派だと思ふの。

F やっぱりとつ払えないわけ？

C とつ払えないわね！

A なおかつ魅力があるっていうのはふしぎなものね。

魅力のある職場

D 私、今も二年でやめようと思ってるけれどね。三年ぐらいいたら、すごい魅力のある職場でしょう？ やめられなくなっちゃうんじゃないかっていうことがこわいの。

今は、この九月に入ってから私は私本当に悩んだの、やめるか、もう一年やるかって。子どもはすごく可愛いから、きつとやめたって夏季保育にはくるだろうし、秋になって何かあったらくるだろうとかね。そしてらあと一年やったって同じだって考えて、だからずばっと、あと一年半やるって決めたの。そのあとは全然違う、もちろん、幼稚園じゃないかもしれないけれど、近くの道ばたで遊んでる子と遊んでるかもしれないけれど、でも何かそこでずしっといっちゃう自分がこわくてやめることにしたの。

A やめようっていうのはほかにした

いことがあるからでしょ？

G やっぱりそうだと思うわ。結局ぬけきれなくなつて、幼稚園くさいところがあくなくなくなつてわかんなくなつちゃうの。それでそれだけの世界で満足しちゃう。

F 幼稚園だけじゃない生活っていうのはいやだと思うの。

G だけど、ほかにあつてもやっぱりそうなのよ、そこにいるからには……。

C Bさんなんかどう？ 私なんかみてるよ、幼稚園部の仕事をやってくれるんだけど、大変な時間をとられるわけ、たとえば病気の先生のあとの処理とかいろいろなことをやってるの。

そうすると、自分のことなんかじゃなくて幼稚園のことを柱にして生きてるよに見えるの、それをききたいと思つて……。

B 私も一時期あつたの、いやでいやでぞーっとするっていう……。でも今

は、結婚しても、子どもができて、それこそ足腰たたなくなるまで幼児教育でものをやりたいなつて思つてるの。よく冗談で友だちなんかにもいろいろ、もし幼稚園の先生くびになったら、用務員さんになりたいって。そこでも子どもに接するわけだけど、今の状態見ると、公立の幼稚園で併設の学校の用務員さんがきてくれてちょこちょこつと用をしてくれているぐらいなの。そういう仕事を見ていると、私なら計画をたてて子どものためにこういうことをやって先生の手助けをしてこういうことをやりたいと思うの、その園で、子どもの生活するその場で教師なら教師、用務員なら用務員で、どういうふうにかかわっていったらいいかっていうのが、自分なりに出てきたっていうか、もうそこでやるんだっていうことが、私の中では根をおろしたのね。だからこういうことをいうわけ。用務員じゃなきゃ事務職員でもいい、そこ

で幼稚園の仕事をやるからっていつて
わけ。

私は組合の仕事なんかで忙しいし、そのために自分の仕事はもって帰ってやつたり、朝早くきてやつたりしているの。

その組合の仕事は、私の担任のことり組の四十人の子どものためなんて、そこまです勝には結びついてはいないけれど、幼児教育のこっちの線をやっていく分には、この部分も必要なんだっていう感じ

で動いてるわけ。だから、すごく忙しいし、夜半近く帰ってくることもあるけれど、そういう中でちょっと出てきた時間ていうのが、自分ではとても貴重だし、そこで、自分のしたいこと、たとえばバスの中で本を読むこととか、映画を見に行くことにも使うの。この前なんか、夏休みは忙しくて中国の出土品展が見られなかったの。それを見に一日だけ京都へ行って、京都でそれを見て、その傍に「冷しあめ」っていったかな、砂場の砂

に泥入れたみたいな飲み物なんだけどと
ってもおいしいの、京都でそんなのの
でぼけーっと一日すごして、そんなふう
にも使うしね。それから、料理が不得意
だからそんなのをやってみたりとか。

私、園の人に「あなた、そんなに忙しか
かったら、休みの日なんて何か会でもな
ければ出ないでしょう」っていわれた
の。でも私はちょっとカチンときて、

「冗談じゃないわよ、家にいるんなら
いで、やりたいこと山ほどあるわよ」
ていったんだけれど……。だから、わり
とそういうふうにつかず離れずみたい
な、でも、意識して絶対離れたいからこ
れをやるっていうんじゃないって、時間か
あったら、ギリギリまで夏休みおわるま
でとび回ってて、九月からバツときりか
えるっていう感じなの。

でも自分の中でも、これが定着したな
って感じたのは今年なの。というのは、
今までだったら、未練がましいっていう

か、九月がせまってくると心が重くなる
わけ。今年は、それが、意外とゆつたり
考えられて、この辺が外にも出たのか、
九月になって職員会議に出たら、前にす
わった先生から「何か夏休みがいいこと
あったんじゃない？」なんていわれちゃ
って……。どこでどうあらわれたのか。

今年の夏休みはそうだったの。あせら
なかつたし、おちついて子どもと会え
し、会ってよかったなあって思ったし
ね。

夏 休 み

C 私も今年はその思ったの、本当に。
それに夏休みの自分の状態はやっぱり違
うのね。たとえば研究会に行くでしょ、
そうすると子どもが目の前にいないわ
け。もちろん私は担任だから四十人の子
どもはいるんだけど、そのだれだれち
ゃんがああだこうだつていうことが頭に
思いかばないわけ。ただ自分ももっと

大きな「保育をしてる人」みたいな感じ
しかないわけ。

それで、夏休みになると見方が大きく
なるっていうのか、自分がいて、自分がど
ういうふうに生きるかっていうことがも
のすごく保育にかかわってくるって考え
るの。保育と自分と、もう一つつなぐも
のは何かっていうと、せまくいえば日
本、大きいえは世界だし、それがどう
いうふうに動いているかによって自分と
いうものもあるし、日本の幼児教育もあ
ると思うの。この三つを、どういうふう
にしてって考えるとどうしても中心は自
分なの。この中心になる自分がどうして
生きて行くかっていうところ、夏休みは
そこが課題で、たえずそこをつぎつら
れてて、「子どもの問題で困った問題」、
なんていわれても出てこなかったわけ。
ところが二学期になって子どもと出あ
うと、同じ種類の研究会に出ても、ガタ
ッと違っちゃうわけ。たとえば二学期に

なって子どものようすを見てたり、こん
な子どもたちにしたいたなんて考えてる
と、グループを作ってこんなことをやり
たいなんて考えるようになるの。そうす
ると、実際にどうしたらいいだろうかと、
去年はどうだったろうかとか、たちまち
日々の保育の細かいことが「ペアッ」と
頭にのぼってくるの。

夏休みの時と、子どもという時では、
自分の物を問題にする仕方が変わって
るんだなあっていうことをすごく感じた
の。

E 問題の出方は違うけど、結局同じ
わけでしょ？「同じ」って言葉でいうと
ただの「同じ」になっちゃうけど……。

(笑い)
夏休みに自分の生き方って、今おっし
やっただけれど、私もとてもそれを感じた
の。私の場合は今年が初めてで、ともか
く九月、始まるのがいやでね。……だけ
ど、子どもを目の前にしたらそこでは違

ったわけ、こんな接し方が自分でできる
んだろうかと思つたの、すごく楽に……
。だけど何かが変わってきたっていう
のは、夏休みにはいろいろあつて、私も
子どものことなんて一度も考えなかつた
のね。それにもかかわらず、今出てくる
のは子どものことばかり、だけれども
そこには、自分がいるの、そういう感じ
がすごくして、これが充実感みたいなも
のになるのかなって思うわけ。

楽しいということ

E 話が戻るけれど、Gさんが幼稚園
が楽しいっておっしゃったでしょ？そ
の「楽しい」の意味がわからないので、
はっきりききたいんですけれど……。

G 別にどうってことないの。やっぱ
り、私と幼稚園でものがすごく近くなっ
ちゃってるってことかしらね。だから幼
稚園に抵抗も感じないし、子どもともす
つすつと行ききしちゃうし……：そういう

時って楽しいでしょ？

A 積極的な楽しさと、つまらなくはない、子どもといれば子どもからボンボンと思いがけないこともできて、思わずキャーッと笑い声がでるといふように、それがもう日常的なことになっている自分ということなのか、それとも楽しいっていうことにもうちょっと積極的な意味があるのかしら。

G じゃないの。毎日のいろんなことがそんなに自分のしこりとして残ってるようなこともないし、平々凡々と楽しいわけね。だけでも、それではいけないとも思うの。やっぱり夏休みが終わると自分をみつめなおす時期があって、その時子どもを見ると、また子どもがよく見えてくる時期があるでしょ？ そうすると、あ、これじゃお互いになだ楽しいだけすぎちゃうなって思うわけ。だから一歩、私が出たい、そこにいったらまた新しい楽しみが出てくるんじゃないのか

なと思ひ、それがまた私をここまでつづけさせたんだと思うの。

D やっぱりちょっとわかんないわ。
A 他の方は？ 楽しいっていうのは？ 幼稚園の生活の中、保育者として、自分としてと二つの立場からで……。

H 私は、理くつ抜きに笑えるっていうことが大人じゃ出てこない、それが出てくるっていうところが楽しい。それもあるし、見えてくる……自分が何かにかけて一生懸命やっていると、必ず見えてくるっていう時があるのね。その時に、はっと自分の存在を感じるそういう楽しさもあると思うの。

A たしかにあるわね。
保育とか人間関係とか、人がかかわって動いていくものの中で、一生懸命にやっつて、その結果、まわりも変わって、自分も変わって、そして何かが見えてきたとき、生き生きできるように思えるの。

B 楽しいっていうと、私は全体的に

子どもといる時間がとか、園でつとめてる時間が楽しいっていうふうにはとらえないの。私は、楽しいっていうとほんわかしたふんい気っていうか、子どもに「大きな大きなおいも」なんて読んであげて、ケラケラ笑ってこれもおもしろい本だなんて思う、そういう空気が楽しいのかななんて今ちょっと思ったんだけれど……。

私が子どもとかかわる時は、もちろん楽しいっていう言葉でいえば楽しいかもしれないけれど、それよりもっと私はいこう考えてるの。子どもにもっとこういうことをしてほしい、つかませたいとか、ちょっと楽しいっていう言葉とは違うんだな。だから「楽しい園生活」「楽しい私と子どもの生活」「じゃなくて、もつときびしいの。そりゃ楽しいし、子どもたちからバンバン返ってくるのはおもしろいし、さつきHさんのおっしゃったようなことはうれしいけれど……。

A 単なる技法的なことじゃなくて、混とんと動いている時、ある時、向こう側からパッと返ってくる、それは成果っていうんじゃないくて、そこで自分がハッとするような瞬間、その瞬間というのは前とは違う次元に自分がいることじゃないかしら。その違う自分が見えた時に生きがいとか何かそういうことを感じられる、生き生きできる瞬間があるんじゃないかしら。幼稚園の生活でそれをいうと、技法的なことに思われやすいけれど、そうじゃなくて。

D 自分をぶつけるわけでしょう。ぶつけるっていうことはすごく苦しいことで、楽しいこともあるけれど苦しい時間というの大きいわけ。それで、すれ違った、すれ違ったっていうことの連続でしょ？ でも先に何かあると思えるの。だから私の感じでは楽しいよりももっとつらいわけ。

G 私、やっぱり何となく違うの。ほ

んわかと楽しいの。何が見えたとか何とかじゃなくて、逆に何か見えた時はいやなわけ。

D 自分が変わる可能性が出てくるから？

G 見えると、子どもから何かか返ってきたり、そうすると自分を見せられたように逆にハッとしちゃうのね、それはあんまり楽しいことではないの。

D だけれど、私は幼稚園で生きられるっていうのは、そこがあるからだと思う。ホワンホワンなんてしてたら死んじゃう。たしかにハッとしたり変わっていくっていうことはおそろしいけど、でも何かあるような気がする。

G それを、見つけていったり、それで自分の方向を教えられていくんだけれど、そういうことがだんだん少なくなっていくわけよね。何となくなれて、こっちのペースになっていくから、子どもとくい違いが少なくなっていくの。

苦しいこと

F 扱いなれちゃう、子どもが扱えるようになるわけよね。でも、その扱うところがいいことじゃないことが多いわけじゃない？

私も今彼女が苦しいのがわかる。去年人がもったクラスを私があつたの。するとその先生の色があるわけだけれど、でも私はその先生じゃないから全然違うわけじゃない？ それで一つ一つやるたびに「そうじゃなかったよ」とか、子どもにとってはささいなことなだけれど、こっちにしてみれば考えてやったことの反応がそれだとカチンとくるわけよ。でも私は私なりの考え方があって私の自己主張があるわけ。でもそこでは前の先生のやり方がいいとか、私のやり方がいいとか正しいとかいう問題じゃないでしょう？ 保育は……。より所はどこにもなくて自分にきびしく返ってくるわけ

ね。だからつらいって言うより、私は
“わからない”っていう表現をすい分し
たの。それは誰も教えてくれないし、教
えてくれても技法だけだし、結局自分し
かないって言うそういうつらさがあっ
て、だけどその中で自分が生み出して
くわけじゃない？

さっき生き方っておっしゃったけれ
ど、自分が安穩と生きたいとか、楽をし
て生きたいとか、苦しみたくなかった
ということだったら無理だと思うの。だ
けど、自分の生み出すこととか、向上し
たいとか、そういう生き方をするんだっ
たらその辛さをのりこえた時の楽しさが
好きなわけよ。それは楽しいっていうよ
りも自分が好きなんだと思うの。子ども
と接して返ってきた喜びが好きなわけ。
だからつらくても何とかして、自分のや
り方を生み出すわけね。ところが、一年
たって何だか扱いなれてくると、子ども
が抵抗できないように扱っちゃうわけ、

今やりたくないと思うことでも、言葉か
けをうまくすると子どもはごまかされる
じゃない？ しかしその子の最初にもっ
ていた発想はつぶすわけね、私が。そう
いうことをしていつちゃうと、また新た
な疑問が出て苦しくなるわけ。今の苦し
みと前の苦しみとはまた違うと思うの。
でも今もっている苦しみをのりこえた時
には、また楽しさがあると思うの。やっ
ぱりそれが好きで、それが私の生き方だ
と思う。

A そういう自分が好きっていうの
は、すぐわかる。でもそういうところ
で落ちついちゃうと何だかとても立派な
ことに思えちゃう。(笑い)

F そんな立派な話じゃなくて、辛い
時のことがわかるから彼女の苦しんでい
るのもわかるのよ。

A 苦しいっていいながら、何かして
るのよね。

C 翌日行けば、子どもがいるから

ね。

D 事務の仕事とちがってやっぱり人
間相手だと、何か一つしても関係がつい
ちやうでしょ。いやなの、自分が見えて
きて……。自分を見るためにやってみ
たいで。その時はつらいとか苦しいとか
あるけど、ただキャアキャア喜べる感じ
じゃなくて、この辺の底の方で喜べる喜
び、というようなものはやっぱり他の仕
事じゃだめだなんて思うの。

それは、対子どもだけじゃなくて、対
大人のところだって、そこで変わらなけ
れば対子どもの場合も変わらない。そう
いうところまで到達するにはずい分かか
ったけれど。

A 皆さんは毎日子どもの中にいて、
自分をとりもどしやす、いい場所の中
にいるなって思うんだけれど……。

D 子どもって、いつも生き生きして
るもんじゃないのよ。

F 本当に、自分が最低の状態の時

に、子どもから返ってきたもので自分が生き生きとしたら最高だと思っけれど、まずめったにない。

C そう、絶対ない、もううるさくてね。

A じゃ、子どもがいるからってというのは？

F 子どもが来ちゃうわけ、いやでも。そしてかえって子どもの方がこちらの状態を敏感に反映するから、こっちが調子が悪いと逃げていなくなっちゃうとか……。 (笑い)

だから、毎日明日までに何とかしなきゃならないっていうので動くの。一つ何かを解決していかないと、保育もどうしようもなくなるだけなわけよ。

A じゃ、直接の動機ではなくても、すごく強いものにはなってるのね。

D くるからくるからって無理にここにこして自己嫌悪におちいたり……。

(笑い)

A ぶすっとしてもいいわけでしょう？

F ぶすっとしちゃうの、無意識に。

ある瞬間、子どもに話しかけられていない時はそういう顔をするわけ。そうするとその顔を見て、子どもは敏感だからわかるわけよ。体の調子が悪いとそれもすごく敏感で、意地悪みたいになるさくなるわね。頭がガンガンしてる時にガンガンやられるからまたガンガンしたり……。 (笑い)

C そして誰かに「あなたどうしたの？」変なこととして「なんていわれるとカーッとして、自分が何してるかわからなくなるの。それぐらい子どもたちの中に入ってるつらいわね。

F ふだんは怒らないようなことでも怒っちゃうの。いつもだったから見逃して、何かに転嫁してるようなことがこっちの神経のいら立ちで出ちゃうの。

A ていうことは、いつもはいかに自

分を出してないかっていうこと？

F そうじゃないの。調子よければ、自分が出てもいい方向にしてあげようっていうふうに出るの。

D ふだんはそれこそ大人の問ならブスッとし通していられるか、無理にニコニコしても通用するかって感じ……。でもそれじゃあだめだって思っちゃう。

A 結局おちつくところ、つらい、どんなにつらいことかかっていうことが再確認されちゃったみたいだけれど……。

(笑い)

おわりに

A そろそろ時間になりますのが、初対面の方も多い中でいろいろ話してきて、何か感ずることもあったと思えます。一言ずつ最後に、そして文句なく今あなたがしたいことをつけ加えて回してください。 Gさんから。

G 感想？ 年とったなあ！

おききすると自分の通ってきた道もある。しかしあと戻りはできないし、だからこれから私はこうやっていかなくちやいけないのかなって、わからないながら、私としての道をさがさなければって思ってます。したいこともこれです。

F 感想、目下のところは運動会が十日で、しなくちやいけないことが一杯の中でここへとびこんできて、いろいろ話をきいて、やっぱり皆同じなんだなっていう自分だけじゃないなって素直な感じ。

今一番したいことは、大和路と木曾路を合わせて歩きたい!!(ウアァァ イイッ)

D 運動会は今日おわって、……やっぱり二年でやめるべきだっていう気がますます強くなったの。

したいこと、遊べる人間、女になりたいと思うの。それから幼稚園だけが子どものいる所じゃないっていう感じがすこ

くあるの。幼稚園をやりますますそう思ったの。

B 私は、気楽にききましたけれど、出てきてよかったなって思ってるの。というのはいよいよ六年目で、私もどの辺からずっとこれが続けるっていう気になったのか、その気持ちを整理しなきゃと思ったの。そういう意味でも、今日みたいな原点にかえった話し合いはともよかったですと思う。

やりたいことは、土曜日の午後だし、ブラブラと歩きたいなあと思ってるの。

E 何か頭が混乱して……感想なんていうと何もいえないなっちゃうから、したいこと。

すごく単純に、やりたいことをやりたい! 私、今苦しいっていったけれどすごい充実感もあるの。それはなぜかっていうと、自分が何も考えないでぶつけて返ってきたものだから、それを大切にしたいと思うの。それは別に子どもとか大

人とかかわけるものじゃないんです。それが今、自分にとって発見になりつつあるのでそれを大切にしたい。

それからすごい腕白坊主が一人いるの、その子とどうやってあとすこしていかうかって考えてます。私も一年で幼稚園から離れるつもりですけど、子どもとは離れたくないっていう感じが今強くなっています。

明日京都に行くから、それを一生懸命やっつけてようと思ってます。

H 私は、やりたいことは、すぐ雪がふるからスキーを一生懸命やる。一生懸命なんていやだな、やっぱりリラックスしてどんだんすべれるようになりたいなっていうこと。

それから、今日出てみて、やっぱり元に戻ったみたいで何年たっても悩んで、悩み悩みきて、気分はおばあさんになっちゃったけれど、やっぱり悩むところは、新卒の人と変わらないなって感じ。

そしてこれからも悩みながらまたいくんじやないかしら。

C この会に参加しての感想はちょっと思いうかばないんだけど、今、子どもたちの生活、そればかりじゃなく全部なんだけれど、「本当のことは何なのか」ということがわからないの、それで、本当にそれは本当なのだろうかという感じでどうしていいかわからないの、自分が。さっき、したいことをしたいっておっしゃったけれど、私もそうなの。

でも、何が自分は本当にしたいのか、っていうことが一つ。それから本当にそれをした時に、ちょっと前までは本当にしたいことをしたら後悔しないなんて思ってたわけ。何か今は、こっちをしたいと思いますってでも、これでやってしまったら後悔するのではないかというようなもう一方の自分がある。自分がどこに動いていいかわからない、にっちもさっちもいかないの。そのいとぐちみたいな

もの、ちょっとでも動き出せるものをつかみたいって一つと、何が本当のことかわからなくなっていることの一つは、幼稚園なり保育所は、子どもの発達を保障して、私たちは子どもを守っていかなければならないとかいわれるわけだけれど、子どもたちの生活を守るっていうことは何を守ればいいのか、それから、子どもたちの発達を見ていくってというのは、その発達っていうものを私がどういうふうにとらえたいのかっていうその辺がすぐくわからないの。

いろいろな研究会に出ても、今の子どもはひどい状態におかれているから、私たちが何とかしなきゃいけないってことははいわれても、じゃ何をどうするかっていうことがわからない、違う研究会に出ても、今度は、大人側が子どもにおしつけているのではないかって考たり……、やっぱり自分の生き方なり何なりは社会に無関係ってことはありえない

し、真の子どもらしい姿とはどんなものだろうかということかわからない、つかみえてないっていう感じです。

さっき、保育は、あの先生が正しくて自分が正しくない、そういうものじゃないっておっしゃったけれど、本当にそうなのね。だから研究会なんかできたことに対して、何かピタリしない、反発することはできません自分のやってきたことに対して問われるとつまっちゃう。だから六年間やってきたことをまとめる時間がほしいの。

A いろいろお話しあいをしていて、それぞれ、一人一人ちがう人なのに、やはり子どもと共にいる大人・保育者として共通のものがあるということ、けれどその反面、一人一人がその人として、一生懸命やっているのだということを感じました。今日は、せっかくの土曜日の午後でしたのに、どうもありがとうございました。

(一九七三・一〇・七)

家なき幼稚園のこと

萩尾 藤江



歴 史

池田市は明治以後、南から商業都市としてひらけ、また土地高燥で自然環境に恵まれ、住宅地として著しい発展をしている。特に明治四十三年に京阪神急行が開通して以来、人口が増した。現在の室町幼稚園の前身である「家なき幼稚園」があった室町も、当時できた住宅地であった。中産階級の住宅地として室町が整ってくるにつれて、婦人の間から子女の教育をとという声が高まり、室町創設当時から在任していた大阪毎日新聞の事業部長であった橋詰せみ郎氏が、当時外国で行なわれていた「ハウスレス・キンダーガーデン」にヒントを得て、常に花や鳥などを友として、屋外で児童の保育をすることをモットーとする、「家なき幼稚園」を立案された。

池田市は、現在でも比較的緑に恵まれているが、当時はな

おさらのこと自然環境は「家なき幼稚園」の理想をかなえるのに絶好の地だったといえよう。

大正八年四月に、呉服社くわらの社前において、文字通りの「家なき幼稚園」が開設された。職員は園長の橋詰せみ郎氏以下女の先生三人と小使いさん一人、園児は三十人ほどであった。

しかしすぐに、お天気の良い日はよかったが、雨や雪の日には園舎がないので困って、その直後、九坪ほどの園舎ができた。設備としては、黒板と積木、それに唯一のベビーオルガンがあった。

保 育 の 実 際

当時の保育のようすを、主任の山脇治子先生のお話からまとめてみると、次のようなものであったようだ。

一日の始まりは朝の集りから始まった。園長の橋詰先生は出勤の途中、必ず園に寄られ、童話などいろいろのお話をなさった。その後、お天気がよければビーオルガンを乳母車にのせ、ござとお茶の入ったやかんを持って屋外に出た。

園児はござにまわってすわり、先生は乳母車にのつたままのオルガンで、「お手々つないで……」などの歌を教えたり、遊戯をしたり、野に咲く花や草をとってきて画用紙にはりつけ、人形、顔、自動車などを作る等の制作をした。その後、呉服神社の境内や野原や川原などを自由にかけ回った。

春にはレンゲでかごを編んだり、首飾りを作ったり、ささ舟を作って猪名川に流したり、桃の木の下でおべん当を広げたりした。また、呉服神社の山道には当時さくらの並木があり、そこにみんなでぼんぼりを作ってつるし、お花見もした。

園舎は住宅地のほぼ中央にあったので、庭の広いお宅からは時々一同が招待され、存分に遊ばせてもらって、帰りにはおみやげをいただいて帰ることもあったという。

このように、「家なき幼稚園」の実績があがるにしたがつて、宝塚、雲雀ヶ丘、箕面等にも同様の幼稚園が設立された。そのうちに、「家なき幼稚園」という名称についていろいろと意見が出てきて、事実上「家ある幼稚園」だからというので、研究の末、「自然幼稚園」と改称されることになっ

たが、園舎の外にあることを原則とする伝統は、ずっと守られた。

現 在

その後、十五年の間「自然幼稚園」は順調に伸びていったが、昭和九年六月に園長橋詰氏が死去され、室町の町内会である室町クラブの手に経営が移され、「室町幼稚園」となった。

現在の「室町幼稚園」は、緑が少なくはなったが、伝統的な「家なき幼稚園」の趣旨を生かした保育を、いろいろな試みがなされている。園長の土田先生も、

「幼児の生活は遊びそのもので、それには自然は欠かすことはできない」とおっしゃって、一年のカリキュラムの中にも園外保育を多くとり入れていられる。

たとえば、近くの猪名川のグラウンドへよく出かけたり、夏には五月山の家で年長組の子どもだけの一泊のキャンプをするなど、できるだけ自然を生かした行事をするように心がけられているようだ。

参考 1 室町々会編「室町の歩み」昭和三十三年

2 談話 「家なき幼稚園」当時の主任 山脇治子

先生 現在の園長 土田素道先生

感想

自然こそ何ものにもまさる偉大な師である、といわれる。そのふところにいだかれながら育つ中で、われわれは自然の偉大な力を、はだで学んでいく。それなのに現在、大人は子どもからつぎつぎと自然を奪っていく。外からも内からも……美しい山はだがブルドーザーによって見るも無残な姿にされ、幼いころ魚と遊んだ小川はにこっている。けれども、さがせば自然はまだ残っている。道ばたの小さな花にも、スモッグによられたつばさをもったすずめにも。

ただ、小さな花や鳥を見て、「ああ、きれいだな」、「かわいいな」と思う気持ち、がどこかにいってしまっている。泥んこでころんでよごれながらも、はだにふれる土を、「気持ちがいいな」と思う気持ち、が忘れられている。ちょっと木に登って、けがでもすると、「もう登っちゃいけません」といわれ、しましう。外からの自然の破壊が進んでいる今日、それをまします内からの破壊でうながすことのないように、「家なき幼稚園」の存在は大きな警告のように思えた。

(写真 呉服神社境内で 47ページ)

あとがき

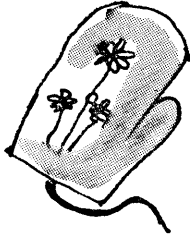
昨年六月号に、柳瀬陸男先生の講演「宇宙の涯・知識の涯」を掲載いたしました。その講演の初めに、先生はご自分のおうけになった幼児教育のことを話されたのをご記憶とされています。柳瀬先生の幼稚園、「家なき幼稚園」のことはその後、現職研究会をはじめ先生方の間でいろいろな形でとりあげられ、ぜひ詳しいことを知りたい、ということになりました。たまたま、児童科出身で現在池田市に在任の萩尾さんが上京され、津守先生を訪ねられました。そして先生から「家なき幼稚園」の話をきかれて、「それならば池田に住んでいる私が調べましょう」といつてくださいました。そして、池田に帰られてすぐ、呉服神社に行かれ、前のようにまとめて送って下さいました。

その後、柳瀬先生からお電話をいただき、大阪へ行かれた折に、昔の「家なき幼稚園」の主任、山脇治子先生（前出）に会われて、「貴重な本を拝借してきました」と二冊の本を見せてくださいました。そして「実は私は、当分多忙で原稿を書くことができないので、この本をお読みになって雑誌に紹介したら……」とおっしゃってくださいました。

それで今後その本の技すいを順次掲載していきたいと思えます。

(編集部)

私の保育



島田 な な み

「四十人!! 本当に一人で?」ミセス・モローは全く信じられないといった表情で私を見つめていた。そして肩をすくめて大きな目をさらに開いて「It's terrible」と言うのだった。

——本当に信じられないはずである。私がミセス・モローの勤めるミシガン州立大学の中にある、デイケアセンターを訪れると、そこには、およそ五、八人の子どもに一人の先生がついているではありませんか。ワイワイした子どもたちがあばれまわっている私のクラスと違って、ままごと・粘土・ブロックなど好きなコーナーに集まっている子どもたちはいたって落ちついていなのだ。各コーナーには必ず先生が一人ついているのだが、その遊びにはほとんど手を出さず、ただニコニコしながらすわってながめているだけである。私が見学したのは短い時間であったが、積木を一生懸命積んでいる子どもたちも、砂場にいる子どもたちも、破れかけたテントにもぐりこんでいる子どもたちも、物のとり合いやけんかはなく、だからといって先生に依存しているようすもみられなかった。子どもたちがおっとり、いきいきしているように見えたのは私の一人よがりだろうか……。

夏休みが終わり、二学期が始まって、ミセス・モローの言う“terrible”な生活が始まった。

始業式の日、子どもたちはうれしげでいっぱいである。長い休

みの間に会えなかった友たちと久しぶりに遊べるからだ。「ボクね、やまのぼったんだよ」「うみでネエーかにつかまえちゃったんだ。こーんなに大きかったんだからー」「あたしはネ、いなかのおばあちゃんちでほたるつかまえたの」など、子ども同志互いに吸引力があるかのように友たちを求め、話に夢中になり、少々興奮気味であった。

☆ Nちゃん弱虫じゃないよ

翌日からプールが始まった。

私の園では、小学校にあるプールの級を、幼稚園の程度に合わせて、水に親しんでいる度合として、シャワーがこわがらずにかけられる『赤』、顔を水につけられる『白』、もぐることができる『もも』、浮くことができる『青』などの級がある。『もも』や『白』の子どもは、もぐったり浮いたりして「ネエー！ あたしもぐれるの、先生みてみて！」「先生、きょうボクに『青』くれる？」「あたしもう『もも』？」と意欲満々。他の子の級が上るの見て「ワア、Sちゃんいいなあ、ボクも『青』ほしいな」とうらやましそう。どの子ども一学期のとき以上にやる気十分である。

そんなある日、プールで『白』の子どもたちがもぐったり浮く練習をしているとき、プールサイドから見ていた『青』の級

をもっているH夫が、プールに入っているN子に声をかけた。

「Nちゃん！ 浮かんでみな。N子はやらないうちから「N子できない」「N子いやだ」と決めてかかることが多い子である。

N子は少しためらって、どうしようかなといった表情。プールサイドの他の子どもから「Nちゃん、できっこないよ。弱虫なんだから！」と声がかかった。「Nちゃん、やってみなよ」とH夫が再び言うと、思い切ったようにN子はザブッと水につこんだ。ほんのちよつとの間だったがN子の体が水に浮いた。

「ホラネ、Nちゃん弱虫じゃないよ」とH夫のうれしそうなお声。N子も水から顔を上げてにっこりした。

子どもたちは友だちのことに敏感である。「あの子はすぐ泣いちゃう泣き虫だ」「あの子はすぐ言い訳する」「あの子は弱虫だ」などと評価している。それを打ち破るには、その本人が、思いきってやってみる努力が必要であり、まわりも、それを促す力を加えてあげる必要がある。四歳に比べて友だち同志のつながりがずっと強くなっているこのごろである。私が「あら！ Nちゃんじょうずに浮けたわネ」と言うより、H夫の一言の方がよりN子にとってうれしかったであろう。友だちを認め、認められるということ、N子もH夫もさらに成長し、こんなところで友だち同志の結びつきが深まっていくのではないかと思われた。

☆ 足がないと思ってるのか？

「オイノ Y 夫。紙もってこいノ」「H 彦ノ ビニール袋もってこいノ」最近力を示しはじめた子どもたちは、自分より弱く、言うことをきく子どもたちに対して命令的である。

「あれ？ A ちゃん、誰かに何か持ってきてほしいとき、『もって来いノ』って言うの？」と私がきくと、A は同じじしながら首を横に振った。

S は「オイ Y 夫ノ、ぼくたちの仲間入れノ」と Y 夫を引っばっている。「いやだよー」と Y 夫。「入れよーノ」二人で押し問答をはじめた。近ごろ S は命令的になって、何でも自分の思う通りにしようとす、思うようにならないので、力づくになつてしまう。力が強いからまわりの子どもたちがこわがって何でも言うことをきいてしまう。といった悪循環なのである。どうしたのかと Y 夫にきいてみた。

Y 「だってボク、仲間に入りたくないんだもん」 T、「じゃ S ちゃんは？」 S 「仲間に入ってほしい」 T、「じゃ仲間に入れノ」って言ったら仲間に入りたくないかな？」 S 「いやだ」 T 「じゃ何て言ったらいかな？」

S (しばらく口ごもって) 「仲間に入ってたて言えはいい」 Y 「そう言ったんだしたら仲間入ってもいいけど——」

自分の欲求は通せてもなかなか相手の立場で考えることはできない。

A はこのごろ T 夫に力を出しはじめ「紙もって来いノ」「テープもって来い」「クレヨン貸せノ」など、自分は動かずに T に命令する。T は何も言わずに言われたとおりに動いている。そばにいた K が「T ちゃんノ A くん自分で持っておいでって言えばいいんだよ。おまえ A くん足がないと思ってるのか？」と言った。こうしたようすをみると、命令されればなしで、それに何の矛盾も感じないで言う通りになっている子、命令されてもいやなことはいやだと言える子、他の人のことでも「それはおかしい」と言える子などさまざまである。命令されたからといって、自分のやりたくないことをやるのはよくないで頭でわかっている、その場になると、強い子の命令をきいてしまうことが多い。命令的な子どもには自分だけでなく、他の人のことも考えてほしいし、命令される子には自分の思っていることをはっきり言えるように育ってほしいと思うのだが、なかなか思うように行かず困ってしまうのである。

☆ 一緒に楽しんじゃう

こうして、思うように行かなかつたり、やり方に行き詰まったり、何をやってもうまく行かないときがある。そんな時に

は、子どもたちのあれこれ足りない面が目につきはじめ「どうしてこうなんだろう」「私は一体何をしているのだろうか」など、自分の力のなさをなげきながら手も足も出なくなってしまう。そんなやりきれない気持ちでいる時、PTA主催の親子読書会があった。これは子ども本の会の先生をお招きして親子一緒に絵本のよみきかせをしていたたくのである。

I先生が「たからものがでてくるよ」といつてカバンからそっと出された本は「十一びきのねことあほうどり」。はじめて出会ったI先生と子どもたちが、あほうどりのなき声をまねしたり、ネコたちの顔になってみたりしながらぐんぐん引きよせられていくのがわかった。ストーリーそのものもユーモラスなものだが、I先生の楽しい話ぶりに子どももお母さんも先生も一緒に笑って笑いきらした。

あほうどりの島へ行って次々大きなあほうどりに出会ってネコたちがびっくりする場面では、すわっていた子どもたちが前にとび出して床にひっくり返ったりしはじめた。うしろで見ているお母さんから「○○ちゃん!!」と注意の声が出る。I先生は「いいんですよ、わたし気にならないから」とおっしゃって楽しく話をつづけていかれた。

読書会のあとでI先生とお話した。「あほうどりが出てくる場所で子どもたちがひっくり返ったでしょ。あれは自分が

ネコになってビックリしてるのネ。ああいう反応が出てくるから幼児はおもしろいわネ」とおっしゃった。私ならあの時どうしていたら。

「お母さんが注意したりするでしょ、でも私ちつとも気にならないの、子どもと一緒にあって楽しんじゃうから」このなげないI先生のことばに何かハッとするものがあつた。このころ注意ばかりが先立って、子どもたちと一緒に楽しむことを忘れていたのではないだろうか。常に注意する方とされる方という関係では、先生対子どもという域を出ないのではないかと。人と人間対人間という同じ基盤の上に立って考えなければいけないのではないかと、気がつきはじめた。

何が *tehdie* かと言えば、四十人という子どもの数ではなく、それだけ多くの子どもたちの先生として、私の「姿勢」がいかにあるかということにあると思われた。

毎日の生活に流され、疲れ切った先生であつてはいけない。子どもに何か要求する前に、まず自分がやわらかさとあたたかさをもっていたいと痛切に感じるこのころである。

(港区立東町幼稚園)

子どもの生きがい



立川多恵子

珍しく夫婦で旅に出た。

その日は、偶然、登りだけの自然研究路を歩くはめになってしまった。私たちは急坂をふうふういいながら登った。主人は、クラブを持たないで、こんな山道を登るのは苦手だとぼやいている。私が「子どもは、この位の登りでないと満足しないと思うわ」というと、「そうだね、子どもは抵抗感を求めて生きていようなものだからな」といった。とにかく二人とも大汗をかいて、頂上に出て、四方の山の美しさに感嘆しながら、残りの平坦な道を軽い足どりで歩いた。帰宅して、妙に主人の言った『子どもは抵抗感で生きている』という言葉が心に残った。

最近になって、子どもの生きがいについて書いてほしいという原稿依頼を受け、この機会に『子どもの抵抗感』ということ

に焦点をしばって考えてみることにした。

わが家の子どもたちはすでに幼児期を脱して、小学校六年生と、三年生になっている。

かけっこ

先日、夕食時に、下の娘の美香が「わたし、リレーの選手に選ばれたの」といった。「え、それはよかったね、おめでとう」というと、「でもね。クラスの女の子の中で、記録七番目でしょう。だから当り前」とえらそうにいった。「でも選手でしょう。頑張らなければ」というと、「まあね」という返事。

その翌日、私の帰りを待ちかねて、玄関先に飛んできた子どもは、「欠席していたA子ちゃんと、月曜日に競走してきめるんだって、大へん、練習しなくては」という。ゆっくり事情を

聞くと、欠席していたA子を交えて、選手全員がもう一度走ってみて、早い子から十人の選手を選びなおすそうである。

その翌朝から、自発的に早起きして、姉につきそわれて、家の周囲を、やや肥りぎみの体で、ふうふういいながら走る。

「ね、お姉ちゃん、記録伸びたかな」「そうね、大分わたしについて走れるようになったもの」

日ごろけんか相手の姉も大変優しい。妹を選手にすることに『はり』をもっている。

「お母さん、一緒に走って」「そうね、走ろうか」子どもに伴走する私に、美香は、「お母さん、もっと本気でないと、つまらない」と抗議する。

「ようし」。私は実力を出して、ぐんぐん上の娘の理恵にせまる。私の後を美香は、はあはあいいながら追ってくる。門前に着いた時、「やっぱり早いね、お母さんは」という子どもの目は輝いていた。いつまでも幼いと思ひ、保護する立場をとった母親が、子どもと思いきりかけることによつて得た、子どもの成長の喜びをかみしめながら、いろいろ考えてみた。

簡単に決ってしまった選手、そのあとに突然あった先生の新しい指示は、子どもに「再び選手に選ばれるだろうか」という一時の不安感を与えた。その結果、「なんとかして、選手になりたい」という願望が生まれ、その願望を達成するため、子ども

の中から、一つの方法が生み出された。

練習場面での努力の過程で、子どもは汗を流し、自分の計画を実行していく喜びと、抵抗感の中に、自信を得、母親に本気でつき合うことを要求する。

子どもは、母親のあとを追って走りながら、汗を流す。練習は、再び選手にえらばれることを目標にしているが、練習そのものの中に、下の娘も、上の娘も、そして母親の私も生きがいを感じる。練習中、汗を流して真剣に競い合った経験から来る抵抗感によるものである。

月曜日になって、予定通り、競走して、十一人中四位を走りぬいた美香は、再びみごとに選手に選ばれた。

山のぼり

夏休みが終わって、美香が『夏休みの思い出』という作文を書くことになった。なかなか着手しないので、きつかけを作つてやろうと「夏休み一番おもしろかったことは何かしら」と聞いた、すると即座に「山のぼり」と答えた。

三泊四日で鹿沢高原の国民休暇村へいき、宿に到着するとすぐ、一七〇〇メートルの山に登った思い出である。村上山の五合目にきた時、子どもはくるっとふりむいて、「もうわたし帰る」といった。私も、同行の私の妹も驚いて、もう少しだから

がんばろうねと励ました。子どもはすわりこんで動こうとしない。仕方がないので、手持のあめを出して与え、「雲の中を歩いて行っているのよ、すごいでしょう」など励ましながら、つれて登ったが、時々、すわりこむので困ってしまった、それでも頂上に登りきった時は、ご満悦で、ニコニコして帰路はかけ足で下山していった。

次の日は一九〇〇メートル前後の湯の丸山に登ったのだが、この日はふもとの牧場からつれの従姉と二人で目標を立て、「あの大きい木まで、がんばろう」とか、「黄色い花がみつかったらお休みね」とか、適当に自分たちで、登山の目標を立てて登っていった。結局ほとんど休むことなく、頂上付近の見晴し台まで一時間半位の道程を登りきった。次の日はあいにくの雨で、一日宿に閉じこもっていたが、最終日にも、都合であとからやって来た姉の理恵を交えて、三時間の道程を黙々と歩きつづけた。

この旅の思い出が、美香にとって、もっとも楽しい思い出になっていたのでその作文からである。鹿沢高原行きの後、家族で九十九里浜にあそんだり、千葉の子どものくにのバラエティに富んだプールで泳いだり、子どもにとって、楽しそうな思い出のいくつかが、存在したように思われたが、美香にとって一番楽しかった思い出は、歯をくいしばって、汗をか

きながら登った山の思い出だったのである。

自らの意志で選んだ困難、それをのりこえる努力の過程で起こる抵抗感、その時点で子どもに生きがいを感じさせると共に、成就の喜びを育てていると考えられる。

子どもは、ある目標に向かって努力する。そこに抵抗が存在し、それをのりこえた時、初めて、充実感や、満足感を得ると考えていた。しかし、子どもの生活をじっくり見ていくと、どうやら、抵抗感を感じる過程で、すでに生きがいを感じている。しかも、その抵抗感は生理的な快感につながる場合が多いのは興味深い。

子どもが行動を起こす。この場合、その子どもがなんの努力もなく、仕とげられるような時には、充実感も、満足感も起らない。

そこで、もう一度子どもを見つめると、意識的な場合も、無意識的な場合もあるが、自ら努力目標を作って、行動していることを発見する。子どもはその努力目標に向かって、困難をのりこえる過程で、抵抗感を体験し、それが生きがいにつながり、次の目標を育て、再びその目標に向かって努力を重ねることによって、ある仕事をなしとげることができ、新しい充実感が起こる。

こうしたくりかえしが、子どもの体を育て意志を育てていく。

百円玉の話

夕方、前から靴をほしがっていた母をつれて駅前まで買いにいった。比較的よい靴がみつかったので、すぐもどった。

室内でなれない靴をはいて歩く練習をしていた母が、急に父に「おじいちゃん、テレビの上のお金使った？」と聞いた。父は「いや」という。私にも、「ママ、お金いじった？」と聞くので、「いいえ」と答えた。そんなやりとりをしていると奥の部屋から美香が出てきて、「これ上げる」と自分の財布から百円玉をとり出した。私はとっさになんのこともわからなかったのだが、母はすぐ美香の手を握ると、正座して、両ひざを合わせて向かい合い「美香ちゃん、このお金どうしたの」と静かに聞いた。子どもは赤い顔をして「あの、あの」とつまっている。母はいつにない真剣な目つきで、子どもの手をもう一度しっかり握り、「大人に黙ってお金を持ち出すと、どろぼうになるのよ」「どろぼうは警察へ連れていかれちゃうのよ。おばあちゃんはその子に育てた覚えはない」と目に涙をためて、美香を見つめる。美香の目からも、大粒の涙がこぼれる。私も、その光景に吸いこまれるように黙ってすわりこんだ。

その時間は、どの位であったか、私には見当もつかなかったが、長い時間のように思えた。「わかったね、わかったね」母

の声がして、美香は泣きながら、自分の部屋に戻った。しばらくして行つて見ると、机に向かって勉強していた。

三番目の話は、一番目のかけっこや、二番目の山のほりで、子どもが経験した抵抗感とは異質なものと思われる。

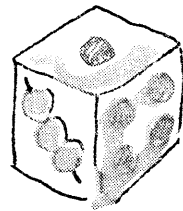
子どもが自発的に目標をたてて努力する過程で起こる抵抗感のように快い経験とはいえない。この場合の抵抗感、子どもの行為に対して、大人側の受けとめ方によって子ども側にも起こった抵抗感であり、外側からみるとむしろ子どもにとって苦い経験と考えられる。しかし、この経験を子ども側からも一度考えなおすと、日ごろなにくれと子どもの世話をしている祖母が真剣に涙を浮かべていつてきかせ、共に涙を流すことよって起こる抵抗感、必ずしも、子どもに苦痛のみを与えているとは考えられない。そこにも、ある種の快い抵抗感が存在しているように思われる。この抵抗感が、祖母と孫とのつながりを一層深めていく結果になったのではないかと考えられる。

叱責された後、朝からどうしても、着手できなかった計算練習に熱心に取りくんでいる子どもの姿に、こんな形の抵抗の尊さを知った。

子どもはさまざまな場所で、さまざまな抵抗を感じる。快い経験につながる場合が多い。その抵抗感が、子どもに生きがいを与え、子どもの成長の核になっていることを知る。

「幼児教育の源流」(X)

マリア・モンテッソーリ〈上〉



利島 知可子

はじめに

数年前、児童発達の研究で著名な、アメリカのD・B・ハリス教授が次のような興味深い発言をしている。「幼児教育には、しばしば流行のようなものがあるようで、今、アメリカでは、モンテッソーリふうにもどるといのが一つの流行のよううけとられてゐるざらがあります。多くの人は何かおもしろいものがないかと探しているようです」(1)

このような傾向は、そのままわが国の幼児教育界にも共通して言えることであろう。おびただしく発表される幼児教育論の中で、モンテッソーリに対する関心も確固たる位置を占めている。

しかししばしば指摘されるように彼女の教育論は、理論的というより直観的であり把握しにくいこと、モンテッソーリ教具は高価

な上、その使用法は教員養成コースで直接学ばなければ明確でないことなど、実践に移す上でさまざまな困難にぶつかる。ゆえにわが国においてもモンテッソーリ法を完全に実施しているところは数カ所しかない。また二十世紀初頭に生み出されたモンテッソーリ法は、古くなっており現代の子どもには適用できないという声も聞かれる。しかしモンテッソーリ・リバイバルが世界的な傾向であることは、今日もなお多くの学ぶべき点があることを示していると言えよう。彼女の教育法の特徴は、何といっても単なる理論や研究にとどまらず、実践の中で生み出され、実践の中で発展していった点である。そこで本稿では、その実践の場となった「子どもの家」の実態、そこで採用された教育法、教育論などを明らかにして、われわれが再評価し、学ぶべき点を探ってみた。

一、「子どもの家」の開設

モンテッソーリが、彼女の教育法を生み出すきっかけとなった「子どもの家」が設立された、サン・ロレンゾー地区とは、一八八八年から九十年にかけておそった大恐慌の結果急増した失業者や犯罪者、低賃金労働者などが雑然と集まっていたスラム街であった。そこには貧困と悪徳が支配し、彼らは暗い、ぼろ建築の中で、文明社会とは無縁の生活を送っていた。ここにローマ住宅改良協会が設立され、それらの古い家屋を改良して近代的で衛生的なビルディングにしようとした。そして、かつての陰惨で薄暗い洞窟のような住居は、清潔で真に家庭的なアパートに化したのである。しかし、両親が働きに行き、一日中家に残されている幼児は、無知で野蠻であり、壁や階段を傷つけ、協会に負担をかけた。そこで彼らをアパートの一室に収容し教育をほどこして、建物の修繕費を節約しようというもくろみのもとに、一九〇七年「子どもの家」が開設されたのである。この「子どもの家」の規約をみると、その目的、性格などが明確になるので次にあげてみよう。

○ ローマ住宅改良協会はこのたび、その共同住宅内に、住民の家族中、小学校就学前のすべての子どもが収容される第〇号「子どもの家」を設置する。

○ この「子どもの家」のおもな目的は、無料で、両親が仕事のためやむをえず家を留守にしている家庭の子どもたちのために、親がしてやれない養育上の保護を行なう。

○ この「子どもの家」においては、子どもの年齢に応じた方法によって、彼らの教育、健康および身体的、道徳的発達に留意する。

○ この「子どもの家」には、指導員、医者、養育係がおかれる。

○ この「子どもの家」のプログラムや時間割は、指導員が定める。

○ この「子どもの家」には、共同住宅の三歳から七歳までのすべての子どもが収容を許可される。

○ この「子どもの家」を利用したいと思う両親の経済的負担は一切ないが、次の義務を履行しなければならない。

(a) 子どもを「子どもの家」に定刻に出席させ、身体と衣服を清潔にし、身体に合うエプロンを着用させること。

(b) 指導員および「子どもの家」に関係している人々に対しては最大の尊敬を払い、子どもの教育においては指導員自身と協力すること。母親は少なくとも週に一回は、指導員と話し合い、彼女に子どもの家庭生活について報告し、また彼女から適切な助言を受けること。

○ 次の者はこの「子どもの家」から除名される。

(a) 不潔な身体のまま、あるいはよごれた服を着て出席した子ども。

(b) 矯正不能と思われる者。

(c) 「子どもの家」に関係している人々に対して尊敬の念を欠き、あるいは施設の教育事業を悪質な行為により妨害するような両親の子ども。(2)

すなわち、「子どもの家」は、両親が働いている、就学前の子どもを無月謝で、長時間（午前九時から午後四時まで）預かり、彼らの発達段階に応じた、教育的、道徳的、身体的配慮を行ない、その実践においては、常に家庭と連絡を取っていた。このような施設は、単に子どものために貢献しただけでなく、社会的見地からみてもまた、学校制度の面においても多くの利点をもっていた。

まず、学校と家庭との断絶は、教育制度上容易に克服できない欠陥であるが、「子どもの家」においては、指導員は子どもたちと同じアパートに住むよう義務づけられており、彼女たちは両親と一体となって共通の教育目的に向かうことができた。また「子どもの家」は家賃の一部で維持されている、両親の共同資産であるという自覚が、教育事業に協力する責任感を助長したのである。

次に「子どもの家」のような家庭的で衛生的な制度に長時間にわたって子どもを預けることができるようになれば、母親は安心した社会的労働に従事できる。すなわち彼女たちは、育児という母親の機能から解放され、男性と同様自由な立場で社会に貢献することが可能になるのである。さらに彼女は、将来はアパートの中に、学校だけでなく、共同浴場、台所、病院、クラブ、読書室などを建て、女性を完全に家庭の仕事から解放するという膨大な構想をいだいていた。ゆえに、彼女の「子どもの家」は、家庭の社会化の第一歩としての位置づけもなされる。この点からも「子どもの家」は単に労働者のためだけでなく、あらゆる階級の家庭にとっても必要な制度である。

二、「子どもの家」の実態

さて一九〇七年一月六日、この「子どもの家」の開設の日に集まって来た五十名余りの子どもたちは、どんなようすであっただろうか。子どもの成長にとって最小限度欠かすことのできない、食物や新鮮な空気、日光さえ、彼らには十分与えられていなかったから、栄養不良は一目瞭然であった。そして見るからにおどおどとした、物も言えないほど気おくれした彼らの顔は無表情で、目は生まれてまだ何も見たことがないように空虚だった。これらのみじめな暗い家で、何ら心の刺激も与えられず、世話もされず、

成長した子どもたちを見た、開設の日に訪ずれていた多くの婦人たちは、彼らは奇蹟でも起こらない限り教育はできないだろうと確信したほどであった。その上、モンテッソーリ自身、すでに彼女独自の方法論を確立していたわけではなく、ただ子どもたちの五感を組織的に教育すること、幼ない普通児と大きい精薄児との一致点を確認すること、を目標にしていたにすぎなかった。設備もスタートした当時は貧弱なもので、彼女が重要な実験を始めるのに希望を燃やしてくれるようなものではなかった。開設にあたって彼女が作らせたものは、子どもたちが自由に移動できるようにすや机、大きい戸棚などの他に、彼女が精薄児研究所で使ったのと同じ教具だけであった。

このように一見非常に恵まれない状態でスタートした「子どもの家」は、モンテッソーリ自身予測していなかったほどの成果をあげた。あの閉ざされたつぼみのようだった子どもたちがまもなく、気おくれは全くなく、目は輝き、表情はほがらかでこだわりがなくなり、突然花咲くように開化したのである。そのようすを見た訪問者たちは彼らのことを「小さなおとな」、「会議中の上院議員」のようだと表現し、「子どもの家」において奇跡が起こったのだと言いつづけた。

では子どもたちは実際にどのように変化したのであるか。次の記述は子どもたちの変化ぶりがよくわかるし、「子どもの家」

の性格を明確に現わしているので引用してみよう。

「そこには三歳から七歳までの四十名の子どもがいて、そのおのおの自分の仕事についています。一部の者は感覚練習をし、他の者は算数に、さらに他の者は文字をさわり、図画をし、着衣わくを取り扱い、またはちりをぬぐい、ある者たちは机に向かって着席し、また他の者たちは床上にしたいじゅうたんの上に膝を組みます。軽くうごかされる物や爪先で歩き回る子どもたちのかすかな物音が聞かれます。ときおりおさえかねる歓声、「せんせい、せんせい」というとおる声、「わたしがしたのを見てごらん」という呼び声などがします。しかしみなが集中しているときの方がずっと多いです。女教師はゆっくりと歩き回り、自分呼んだ子どもらの方へ行き、彼らをよく監視して、用のある者はだれでも、すぐ彼女の声を聞き、用のない子は、彼女がいるのかどうかまるで気づかないようです。時間は経過し、みな黙っています。……………」

彼らの活動に対するこんな活発な興味にかかわらず、子どもたちが物を奪い合うことは決して起こりません。

三歳児が七歳児のそばで仲よく働き、すべてがきわめて深い平和のなかで成長します⁽³⁾

また、普通であれば、叫んだり、何でもこわしたり、世話をされなければならぬ年齢である四歳児が、食事の準備のさい、ナ

イフや食器を配り、五つものコップをのせた盆を運んだり、熱いスープを一滴の汁もこぼさず配ったりするようになったのである。

このような、子どもたちの驚くべき変化は決して命令や警告や説諭によつては到達されないであろう。それは種々な条件の相互作用の結果であつたと考えられるが、おもに次の三つがあげられる。まず、子どもたちにとつて適当な、彼らが何の束縛も感じないような快い環境、次に彼らの注意力を集中させたモンテッソーリ教具、そして、大人の、教育に対する謙虚で消極的な態度。これらの三点は、われわれが幼児教育を実践する上で、ただちに取り入れられるものばかりではないが、学ぶべき点を多く含んでいゝるし、モンテッソーリ教育の中核を占めるものであるから次に説明してみよう。

(一) 環境

教育において環境の力が重要であることは、ルソーをはじめ多くの教育者によつてすでに説かれていゝるが、モンテッソーリの場合、子どもの本質が自由に表現できるような環境を彼女自身が作つてやり、その作られた環境の中で教育を行なつたことが特徴である。

子どもは創造と発展の重要な時期にゐるのだから、われわれは

彼らの力が発揮できるような環境を用意してやらねばならない。そうすれば、彼らのエネルギーが環境に働きかけ、また環境が彼らの活動に必要な手段を提供してくれる。子どもの発達段階に応じた環境の中では、われわれが彼らに特別働きかけても、自然に彼らの心は発露するし、彼らの秘密も打ち明けられるにちがいないのである。

それではモンテッソーリが子どもたちのためにつくつた環境である「子どもの家」はどのようなものであつただろうか。

まず前述したように、机やいすは子どもたちが自由に持ち運びできるように作られていた。当時の学校では、子どもたちが動き回るとき机やいすをひっくり返すからと、教室のベンチは釘付けにされており、彼らは列をなしてビンでとめられているちやうのように腰掛けていた。そこでは不動と沈黙が強いられ、彼らの個性や自発性は抑圧されていると批判した彼女は、子どもの自由な活動を保障するためにも、小さな軽い家具を用意したのである。また戸棚も子どもの手が届くほど低く、勝手に物を並べたり持ち出したたりできるようにになっていたし、黒板は壁にそつて、彼らが自由に描けるようにかけてあつた。その上に望ましい条件としては、子どもたちが遊んだり、眠ったり、仕事をしたり、食事をしたたりできるように、屋根のついた庭があること。中央の居室に続いて浴室、食堂、談話室兼居間、作業室、体育室、寝室などを

備えていること。各自小さい植木鉢を持っていて、植物の栽培ができるようになってきていること、などであったが、彼女は別に「子どもの家」というきままった型を要求してはいたのではなく、その時の事情や資力に応じて設備すればよいと述べている。

また彼女は、子どもの自然環境としての家庭は同一年齢の子どもによつては構成されていないからと、当時の一般的な慣習に反して、クラスを年齢別によつて編成しなかった。だからクラスにはさまざまな発達段階の子があり、大きい子は小さい子を助けてやり、無意味な競争や無駄な誇りなどはみられなかった。

次に彼女が環境の基礎的性質として四つあげているので簡単に述べてみたい。

(a) あやまりの訂正—後に述べるモンテッソーリ教具はすべて子どもたち自身であやまりを訂正できるように作られているが、その他備品は明るい色で光沢があり、よごれがすぐわかるようになってきている。また動きやすい家具は、子どもたちが粗野で不行儀なふるまいをすればころがったり、きしんだ音を出したりするようになっていく。このように環境のすべて物が子どもたちのあやまりや不行儀、乱暴な行為などを改めさせるようになっており、環境自体が教師であると言えるのである。

(b) 美学—子どもを取りまく備品は、色やつや、形の調和など

子どもを引きつけるように作られている。

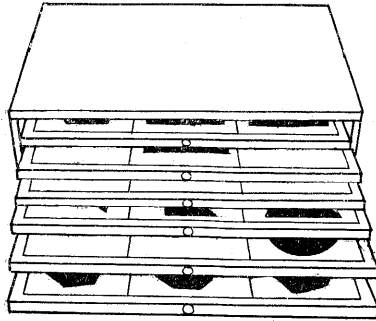
(c) 活動—教材は子どもの活動に適切なものであること。すなわちあらゆるものは、動かしたり、回したり、ばらばらにしたり集めたりできるように作られていなければならない。子どもたちはいつでも自由に利用できるようになっていく。

(d) 制限—教材は量的にも制限されていなければならない。われわれは子どもたちのための教材や玩具は多ければ多いほど、彼らの発達にとつて望ましいと考え、次から次へとおもちゃを買って与える。しかし彼女によれば、物が無秩序にたくさんあると、子どもは心の中が混とんとし、何かしようという意欲をなくしてしまうのである。ゆえに、われわれが子どもにとって必要なものだけを与えるという態度をとれば、子どもたちの精神に秩序をもたらし、明晰を与えることができる。以上の四つの原則からも明らかなように、モンテッソーリの言う環境とは、子どもがその中で自由に選び、したいだけそれを用いられるすべての物を指している。ゆえにすでに述べたようなもの他に、モンテッソーリ教具も重要な、環境の一部であった。そこで次にモンテッソーリ教具について述べてみよう。

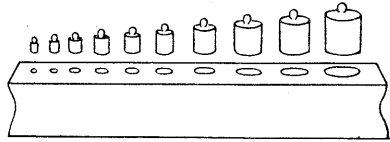
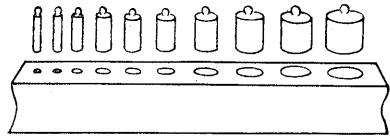
(二) モンテッソーリ教具とその他の教具

A、感覚教育のための教具

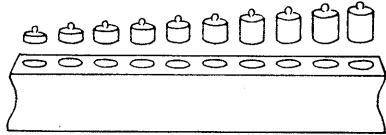
- (a) 三種類のさし込み教具〔円柱さし〕
- (b) 大きさの漸減する三種の形からなる角材
- 1 桃色の立方体〔塔〕(二辺の長さが一〇センチから一センチまで次第に減少する立方体の一セットで最大のものをじゅうたんの上面において漸次につみ重ね、塔を作る)
- 2 かば色の四角柱〔階段〕(長さはすべて二〇センチで、最大の横断面の方形の一辺が一〇センチから最小の一辺が一センチまで漸減する一〇コからなる。これらをじゅうたんの上面に段階的にならべ、階段のように整頓する)
- 3 (イ)赤色の角棒 (ロ)赤色と藍色の交互の角棒〔算数棒〕(方形の断面はすべて二・五センチ角で一〇センチずつ長くなる。最長の棒は一メートル、最小は一〇センチで、床の上に、長さにしたがって段階的にオルガンのパイプのように並べる)
- (c) 四角錐、球、円柱、円錐、立方体、稜体などの幾何学形立方体(目隠しをしてこれらの立体にさわってみて形の名をあらわす)
- (d) ざらざらとすべすべの表面をもつ方形の板〔触覚板〕(あらさとなめらかさの触覚の相違を指先でなでてみて納得する)
- (e) さまざまな布ぎれ〔布合わせ〕(ビロード、絹、綿、麻などの布地を目隠しをして、手ざわりで整理する)
- (f) 重さのちがう板札〔重量板〕(大きさは等しいが、重さとの異なった種々の木板を手にとって重量感の訓練をする)
- (g) 各々六十四枚の色板を入れた二つの箱〔色板〕(赤、オレンジ、黄、緑、青、紫、かば色、ピンクの八原色とその各々の色が濃い色から淡色まで八段階に変わる色板を机の上でまぜて、色ごとに濃淡の順に並べて、色彩感覚の練習をする)
- (h) はめ込みの幾何学形を入れた引き出しが六つある小さいタンス〔幾何学形入りタンス〕
- (i) (h)と同じ幾何学形を同じ色の色紙から切り抜いた形をはりつけた三種のカード〔幾何学形カード〕(第一種は、藍色紙から切り抜いた形をはりつけたもの。第二種は、五ミリ幅の輪郭だけを藍色紙から切り抜いてカードにはりつけたもの。第三種は、幾何学形の輪郭を黒インキで描いたもの。各々十二種類の形で計三十六枚のカードが立方体の箱にしまっており、これらのカードを用いて平面図の形を認識する)
- (j) 六個の厚紙の円筒〔雑音筒〕(筒は木のふたがしてあり、大きい音からほとんど聞きとれないほどの音まで六個の筒がそれぞれ二つずつある。目隠しをして同じ筒の音を対に並べたり、音の強さの順に並べたりして音感を鍛える)



円柱さし (右)



幾何学形入りタンス (上)



(k) 音感ベル、五線板、楽譜記号を表わす小木片（一オクターブが全音と半音とで作られているベルをハンマーでたたいて音階に従って並べたり、音色を覚えたりする）(4)

以上の他に温覚、嗅覚のための教具もあるが、これらの感覚教具を通常モンテッソーリ教具と呼んでいるのである。その中、モンテッソーリ法の特徴をよくあらわし、子どもたちの最も好んで用いる円柱さしと幾何学形タンスについてももう少し詳しく説明してみよう。

○ 円柱さし

上の図(5)からも明らかのように、三つの枕木のような木材に各々十個の円柱がさし込めるように穴が空いており、円柱にはポタンのようなつまみがついている。第一の枕木には、高さは同じで次第に細くなる円柱、第二は、高さと同様に減少する円柱、第三には、直径は同じで高さが減少する円柱がそれぞれはめられている。教師は、種類の枕木から円柱を抜き出して机の上で混ぜ、それをさし込むのだと告げるが、教師自ら、がしてみせるのではない。子どもは、円柱を大きすぎる穴にさし込んだり、小さな穴に大きな円柱をさし込むことはできないので子どもたちはじっと考えこみ、いくつかの円柱がぐさぐさなのを発見する。そ

して自分の力で正しい場所にはめかえてみて、全部はまり終えらると彼らの心に満足感がみなぎり、何度もくり返して練習するのである。このように、練習の過程で誤っていても、教師の力を借りることなしに教材自身の構造で誤りが訂正できまるようになってくる。この教具は大きさの相違を識別する能力を養なうのであるが、練習をくり返すことによって、観察力を養ない、事物を比較し、判断を下し、結論を引き出すことができる。

○ 幾何学形入りタンス

図(6)のような、六つの引き出しのある小タンスの中には、それぞれ六つの正方形のわく板がはいっている。そしてそのわくの中には藍色の、小さなつまみのついた幾何学形が入っており、その形を取り出すと、同色の底が見えるように、もとの形と同じ形が藍色紙ではってある。第一の引き出しには直径が漸減する六つの円形、第二には、一つの正方形と高さは正方形と同じだが幅が漸減する五つの長方形、第三には、辺と角がさまざまな三角形、第四には、五角、六角、七角、八角、九角、十角形、第五には、卵形、楕円形、菱形、長方形、不等四辺形、不並行四辺形、第六には、何もはめ込まれていない四枚の木板と不規則な幾何学形がそれぞれ納めてある。

このはめこみ幾何学形の練習は、円柱さしと似ている。すなわち幾何学形を取り出して机の上で混ぜ、子どもはその形の輪郭を

人さし指と中指の先でなでて形を識別した上で、もとの場所にはめる。この際も形は正しい場所でないといびたりはまらないから、誤りの訂正は教具自身によってできるようになっている。なれてくると目隠しをして、形を触覚だけで識別する。

これらの教具はモンテッソーリが精薄児教育に用いたのと同じものであった。彼女は最初これらの教具を幼児に適用することに自信はなかったのであるが、「子どもの家」で子どもたちに使わせてみたところ、彼女自身も驚いたほど、彼らは興味を示したのである。たとえば、三歳の女の子が円柱さしに注意力を集中して、周りでいくら騒いで注意をそらせようとしても無関心で、四十二回以上も練習をくり返したのである。そして彼女は、精薄児のための方法を幼児に適用することは論理的であるとの確信をもつようになった。なぜなら、筋肉運動は調整されていないし、感覚器官は完全に発達しておらず、また言葉は未発達であるなど、幼児と精薄児を比較することが可能だからである。またこれらの教具を普通児に使わせる場合、教師はできるだけ子どもたちに干渉しないようにして、彼らが自己教育ができるようにしなければならぬ。すでに述べたように、子どもたちが誤りをおかしても、教具自体の構造が、それを訂正できるようにになっているので、教師は最初に教具の使用法を告げ、子どもたちが作業に集中してきた

ら教師の援助は直接には不必要なのである。そしてこれらの教具の中、子どもたちは好きなものを自由に選ぶことができ、いつまで使用してもよいのである。モンテッソーリが子どものも
 由、自発性、自主性を重視していたことはここにもあらわれてい
 るといえよう。しかし彼女は子どもたちが教具を使って規定以外
 の遊び——たとえば円柱さしの円柱を車に想像して引っぱった
 り、色板で家を建てて遊ぶとか——を行なっていたら、教師がそ
 の遊びを禁止するように要求している。このような厳格な態度
 は、子どもたちの自由な想像性や創造力を抑圧するものであると
 批判されるようになるのであるが、彼女は注意力の集中現象は、
 事柄との交わりがなんらかの外部の目的のためでなく、純粹に事
 物そのもののために起こる時だけに万能であるとみなしていた
 し、自由といっても人間には従わねばならない事物の法則がある
 ということを教えるために(7)、規定以外の使用を禁止したのであ
 る。しかし子どもの自由遊びを大幅に認めていたフレーベルの思
 想が伝統的な幼稚園で、モンテッソーリ法が取り入れられた場合
 には、教具の自由な使用法を許していたところが多かった。

B、文字、数字の指導のための教具

- (a) ささまざまな幾何学形が並べてある。二枚の斜面の板つき台
- (b) 砂紙から切り抜いた文字をはりつけた板札〔砂紙文字〕
- (c) ささまざまな色の厚紙から切り抜いた大きなちがう二種の

アルファベット

- (d) 砂紙から切り抜いた数字をはりつけた板札〔砂紙数字〕
- (e) なめらかな紙に同じ数字を書いた大きなカード〔計算に用
 いる〕
- (f) 計算棒を入れた二つの箱(各々五つの仕切りがついてお
 り、0から6まで45本の紡錘棒が入っている)
- (g) いろいろな図形を入れた紙ばさみと色鉛筆
- (h) ひも結び、ボタン掛けなど手の訓練のためのわく〔着衣わ
 く〕(8)

これらの教具を使って子どもたちはすでに四歳で読み書きがで
 きるし、たいていの子は百まで数え、さらにすすんだ子は、足し
 算、引き算、掛け算、割り算などもできるようになったのであ
 る。しかしどの子どもでもそのようなことが可能なのではなく、モン
 テッソーリ教具により感覚を十分発達させ、また注意力、観察
 力、比較、分類する能力を養った子でないとそのような奇蹟は
 起こらないのである。

C、実用生活訓練のための教具

「子どもの家」とはその名が示す通り、子どもがその家の主人で
 あり、あらゆる家具は彼らのサイズに合わせて作ってあった。そ
 してそれらは子どもたちの共有財産とされ、自由に使うことがで
 きた。一方、彼らは家族の構成員としての責任があり、家政のす

べては彼らに任されていた。すなわち、じゅうたんを敷き、使わない時にはまく。テーブルクロスを食前には机にかけて、食後はたたむ。食卓の用意をし、食後の片付け、食器洗い、食器を戸棚にしまう。また掃除をし、洗濯をし、くつもみがく。このような実用生活の訓練のために次のような用具が準備されていた。

○ ボタン掛けやひも結び、ホック掛け、ちよう結びなどができるようになる着衣わく。洗面器、ほうき、ぞうきん。ちりとちり。靴、衣服用のブラシ。アイロン。

(三) 大人の消極的態度

まずモンテッソーリ自身、前もってモンテッソーリ教育法というものを確立して「子どもの家」の指導を引き受けたのではなく、彼女はただ子どもを観察して、彼らの存在に適應しようとする方法から出発したのである。そのために彼女はたえず子ども自身から学ぶという態度で、謙虚に、「子どもはいつも私の教師であった」と述べている。また設立されたばかりの、将来のなきそ的な「子どもの家」には、教師の資格をもった女性など志願する者はなく、「雇われたのは熟練のない、野心もないような女性であった。しかし彼女には、有資格者にはありがちな偏見や先入観はなく、まさに子ども自身から学ぶという態度を身につけるにふさわしい人物であった。その上、子どもたちの両親といえは、ほと

んどが文盲で、子どもの教育に関心など持っていなかった。ゆえに親の利己心から生じる、性急で過大な要求もなく、全面的に教師に任せきっていた。「子どもの家」の教育方針に不満を言ったり、ブレーキをかけたたりする者は皆無であった。

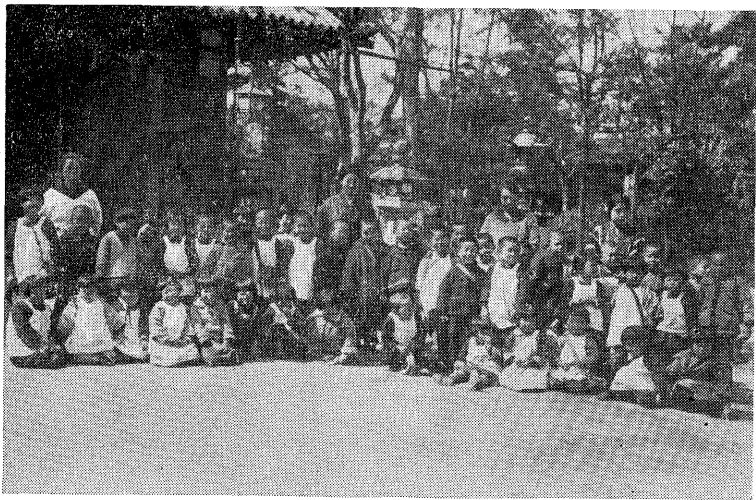
このように、モンテッソーリ、教師、両親、すべて、子どもをとりまく大人たちは、「深い意味の静けさ、白紙の心境、こたわりのない心、精神的謙虚さ」をもって子どもに接したのである。だから真に子どもを理解することができたし、彼らの興味や関心に応じた教育が可能になったといえる。また子どもを一つの型にめ込もうとするような態度もみられず、子どもたちは、自由な発展ができ、秘められた無限な可能性を十分に發揮することができたのである。

われわれは、真に子どもの立場に立った教育を行なおうとするなら、以上のような、謙虚で消極的な態度は不可欠なものに思われるが、すでに述べたように「子どもの家」においては、環境自体の中に教育力があるように整備されていたので、大人は積極的に介入しなくてもすんだのである。ゆえにわれわれの消極的な態度は、常に環境の整備と結びついていなければならないといえる。

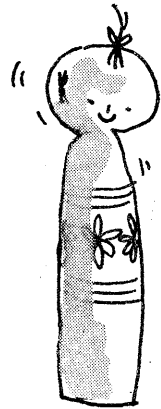
(広島文教女子大学)

引用文献

- (1) デール・B・ハリス、津守 真著「児童発達教育学」お茶の水女子大学家政学講座4、光生館、昭和四十六年、二一九ページ
- (2) Maria Montessori: The Montessori Method. (Translated by E. George) 1964. p. 70/1.
- (3) M・モンテッソーリ著、鼓 常良訳「子どもの発見」国土社一九七一年、三三九、四〇ページ
- (4)(5)(6)(8) 教具の名称および使用方法については、M・モンテッソーリ著、鼓 常良訳「わたしのハンドブック」昭和四十六年、一九一〇九ページと「子どもの発見」一三六一一八八ページを参照にした。また、図は「わたしのハンドブック」から転用した。
- (7) P・オスワルト著、保田史郎訳「モンテッソーリ教育における児童観」理想社、昭和四十六年、三八、九ページ。



幼児の家庭生活と音楽リズム



清水 美代子

幼児が限られた家庭生活から出て、同年の仲間と生活する場をもつことは大きな変化で、かつ大切な意義をもつものであるが、大人の考え方のいかによってはその意義を取り違えたり、せっかくの有意義な生活の場をこわしたり、伸びようとする芽を摘み取ったりすることがかなり多いと思われるが、「音楽リズム」にも同様なことは言えると思う。行動を伴うことだけに、その反応を相当はつきりと子どもたちが出しているのに無視されがちな場面は大変多い。それが教育の場でいろいろな問いかけになって現われているように思われる。

何といっても、音楽性^{注I}やリズムに反応して動くことが一番育つのは、一生の間でこの時期であるし、こうして育った感覚はいろいろな面に作用して、人間の^{注II}な成長にもかかわりがあるので、望ましい活動を育てなければならぬと思う。そのためには幼児に對する正しい理解ができるように努力をすること、そのかわ

り方についての反省を忘れてはならない。保育の場では、もっと遊びの場を与えて自主的な活動のできる力をつける必要があると、その声も高いが、それこそ幼児期の「音楽リズム」のもつ根本的な目標である。自分の力で行なえるように育てることこそ一番のねらいで、望ましい発達とはそのための基礎的条件を積み重ねつつ、その内容に反応していくことで、そこに喜びと自信と愛情が育つものであると思う。

私は子どもが幼かったころ、音楽の個人教授を受けさせてみて、幼児の音楽教育は何かこれでは違うのではないかと考えたことがあった。その時は何だといえなかつた原因の一つはそのことであると同年かたつてから気がついた。しかもこのことは大人の暖かい愛情と、系統的な実践の場で励ましつつ繰り返し行なうことが条件であることにも気づいた。しかし大人が素直に子どもの行動を受け入れるならば、子どもたち一人一人について何を育て

べきかは大方気づくが、辛抱強く育てることはなかなか大変なことであることもわかった。幼児のためによい指導者が多くなることを願ってやまない。私も、自分の経験の中で正しい見つけ方を誤らないための模索を続けて行きたいと思っている。音楽教育研究者の眼もだんだんと幼児教育に向けられて来ているので実りの多くなることを信じている。

I 家庭での遊びの調査

一九六九年、OMEPPの国内会議に出席した時、そこでのテーマは「子どもと遊び」についてで、いろいろの方のご意見発表を聞いた。翌年の地域大会も東京であったので、他国の方からのご意見も多かった。そして今一度「音楽リズム」と遊びの関係について考えて見なければならぬと思った。何十年か前までは遊びの中にいっぱいあった歌遊びは何が取って変わったのだろうか、現代の子どもの遊びとは一体何だろうか、そんな問いかけもこの発表の中にはあった。そういえば私がこの仕事を始めたころ子どもの遊びを学生に調べてもらったことも思い出して、附近の保育園や幼稚園へ今一度カメラを持って学生と出かけた。その結果、子どもばかりでなく大人にとっても大切な遊びの基盤はこの時代に育つものであるという思いが学生の中にだんだん濃くなってきた。そして家庭での子どもの遊びが幼稚園や保育園の遊びとどん

なつなかりをもっているか、また母親たちが子どもの遊びをどう見つけているかを知るために見学したことを参考にして、家庭遊びを調べることになった。

この遊びの中から「音楽リズム」に関連した遊びもあるわけで、子どもにとって遊びに近い音楽リズムとは何であるか知る手がかりであるとも考えた。表Iはその結果である。◎印は「音楽リズム」に関係の深いと思われるもので、一番多数だったテレビは実際にはこの年代になると、別な関心の方が強くなってあまり大きな影響を受けないように思われる点もある。むしろ二歳前後注IIIから三歳前後の方が、直接リズム運動や、歌唱の影響を多く受けるように思われる。それは年長児等が主題歌やコマーションングを歌ってもほとんど正しく覚えていないことや、二、三歳の子どもが幼児のうたを熱心に聞き、比較的正しい言葉で覚えること等を思い合せるとうなずける。次の表IIの家庭で歌う歌からもそんなことがうかがえると思う。その他に◎印をつけたのはこの中に木琴、オルガン、電子オルガン等の楽器があげられているためである。

この表によるとこの年代の遊びはずいぶん多い。このような調査をする時いつもながら母親が真面目な解答をよせてくださることで感謝するのである。調査の対象地がいずれも住宅として開発されている地方なのでまだまだ子どもたちの遊ぶ場所がいっぱい

〔表1〕

調査地 名古屋市 名古屋市中村区、犬山市、岩倉市、小牧市、
 江南市 11幼稚園、3保育園 (回収率：62%) 人数 943名 <男子3歳<29名 4歳<135名 5歳<132名 6歳<81名
 屋内遊び (S46.8)

3 歳	人数	%	4 歳	人数	%
テ レ ビ	58	80	テ レ ビ	246	85
絵 本	40	56	お り 紙	173	59
おもちゃ屋ごっこ	39	54	絵 本	162	56
つ み 木	37	51	ぬ り 絵	149	51
字 あ そ び	31	43	おもちゃ屋ごっこ	139	48
フ ロ ッ ク	27	38	フ ロ ッ ク	122	42
ま ま ご と	25	37	つ み 木	109	38
お り 紙	25	37	ま ま ご と	103	32
人形あそび	21	29	ぬ ん 人 土	87	30
ぬ り 絵	21	29	人形ごっこ	86	28
粘 土	18	25	字 あ そ び	75	26
フ ラ ン コ	17	24	医 者 ご っ こ	57	20
ホ ー リ ン グ	16	22	の り も の ご っ こ	46	16
医 者 ご っ こ	14	19	ホ ー リ ン グ	46	16
の り も の ご っ こ	11	15	お 客 ご っ こ	44	15
す べ り 台	10	14	ト ラ ン プ	44	15
お 客 ご っ こ	9	13	カ ル タ	41	14
◎ピ ア ノ	7	10	お 店 ご っ こ	39	13

5 歳	人数	%	6 歳	人数	%
お り 紙	235	55	テ レ ビ	118	75
テ レ ビ	221	48	お り 紙	90	58
絵 本	205	48	おもちゃ屋ごっこ	75	48
おもちゃ屋ごっこ	155	36	絵 本	73	47
フ ロ ッ ク	153	36	ぬ り 絵	71	45
粘 土	152	36	粘 土	64	41
ま ま ご と	151	35	ト ラ ン プ	59	39
ぬ り 絵	137	33	ま ま ご と	47	30
人形あそび	131	30	人形あそび	45	30
お 客 ご っ こ	127	30	カ ル タ	45	30
つ み 木	125	30	フ ロ ッ ク	44	29
ト ラ ン プ	125	29	字 あ そ び	44	29
カ ル タ	118	27	つ み 木	39	25
字 あ そ び	115	26	医 者 ご っ こ	28	16
医 者 ご っ こ	109	26	ホ ー リ ン グ	24	15
ホ ー リ ン グ	88	21	す べ り 台	26	15
◎ピ ア ノ	86	21	◎ピ ア ノ	20	13
く み 絵	76	18	く み 絵	17	11

19	お店ごっこ	6	8	アラソコ	37	13
20	トラソコ	5	7	すべり台	36	12
21	くみ絵	4	6	くみ絵	28	10
22	輪なげ	4	6	◎ピソコ	24	7
23	カールタ	3	4	◎おて玉	11	4
24	ソジャクベルト	3	4	おはじき	8	3
25	お手玉	2	2	パチソコ	8	3
26	パチソコ	2	2	輪なげ	8	3
27	おはじき			ピソコ	4	2
28	ピソコ			ソジャクベルト	3	1
29	その他			◎その他	5	2

お店ごっこ	74	17	お客ごっこ	13	9
アラソコ	74	17	のりものごっこ	13	9
すべり台	61	14	アラソコ	12	8
のりものごっこ	54	13	お店ごっこ	9	6
輪なげ	38	9	◎お手玉	8	5
パチソコ	28	7	ソジャクベルト	7	4
ピソコ	26	6	輪なげ	6	3
おはじき	19	5	パチソコ	5	3
◎お手玉	18	4	ピソコ	4	3
ソジャクベルト	1	—	おはじき	3	2
◎その他	7	(2)	◎その他	5	3

屋外遊び

	3	歳	人数	%	4	歳	人数	%
1	砂あそび		56	78	砂あそび		211	73
2	アラソコ		46	64	水あそび		191	66
3	三輪車		46	64	アラソコ		172	59
4	水あそび		36	50	三輪車		157	58
5	すべり台		29	40	すべり台		139	48
6	ままごと		27	38	ままごと		110	38
7	ボールあそび		21	29	自転車		105	36
8	シャボン玉		18	25	シャボン玉		101	35
9	かくれんぼ		18	25	ボールあそび		84	29

	5	歳	人数	%	6	歳	人数	%
砂あそび			280	66	自転車		96	62
アラソコ			187	44	砂あそび		95	61
自転車			181	42	アラソコ		83	54
ボールあそび			178	42	水あそび		78	50
ままごと			165	39	ボールあそび		64	41
すべり台			153	36	シャボン玉		55	35
シャボン玉			143	34	かくれんぼ		55	35
おにごっこ			128	30	すべり台		50	32
なわとび			120	28	ままごと		44	28

10	㊦かごめ	15	21	かくれんぼ	76	26
11	自転車	14	19	おにごっこ	69	27
12	のりものごっこ	12	17	ジャンブルジム	46	16
13	おにごっこ	11	15	なわとび	42	14
14	ジャンブルジム	8	11	㊦かごめ	41	14
15	ちゃんばら	4	6	㊦花いちもんめ	26	9
16	なわとび	4	6	のりものごっこ	26	9
17	㊦通りやんせ	3	4	ちゃんばら	20	7
18	㊦花いちもんめ	3	4	ゴムとび	14	5
19	タイヤあそび	2	3	㊦通りやんせ	13	5
20	かんけり	1	1	かげふみ	10	3
21	石けり	1	1	始めのー歩	10	3
22	かげふみ	1	1	タイヤあそび	6	2
23	ゴムとび	1	1	かんけり	5	2
24	始めのー歩			石けり	4	1
25	ローラースケート			ローラースケート	1	
26	その他			その他		

	かくれんぼ	116	28	なわとび	40	26
	三輪車	112	26	三輪車	40	26
	水あそび	86	20	おにごっこ	37	24
	ジャンブルジム	54	13	ジャンブルジム	35	23
	タイヤあそび	54	13	のりものごっこ	20	11
	のりものごっこ	48	11	ちゃんばら	16	10
	かげふみ	46	11	始めのー歩	15	10
	㊦かごめ	46	11	かんけり	15	10
	㊦花いちもんめ	38	9	かげふみ	14	10
	始めのー歩	29	7	ゴムとび	13	18
	かんけり	28	7	㊦かごめ	7	5
	石けり	28	7	㊦花いちもんめ	8	5
	ちゃんばら	28	7	㊦通りやんせ	7	5
	ゴムとび	24	6	石けり	5	3
	㊦通りやんせ	19	4	タイヤ遊び	2	1
	ローラースケート	2		ローラースケート		
	その他(鉄棒)	5	1	その他(鉄棒)	3	1

あるからか、遊びの種類も豊かであるし、幼稚園の一部をのぞいては園でもよく遊んでいた。遊びの少ない地区からの解答は種目も少なく、回収率も少なかった。そして子どもたちの遊びの中で「音楽リズム」に属する部分は実に稀薄であるし、特に男児に

いてはほとんど調査の上に出てこなかった。遊びにはリズムもあるし、身体活動もあるので、「音楽リズム」に関連したものが出なくてもいいではないかという考えも成り立つが、実際にはまだまだ「音楽リズム」を重視する保育形態の実状と、リズム感覚と人

間生活のかかわりを思う。保育の中ではいろいろの形で行なわれる「音楽リズム」が、表では楽器遊びと「わらべ歌」による歌遊びの形で取りあげられている。子どもが育つ過程で行なう遊びの中には子ども自身が友だちとかかわりの中で育てていくものと大人とかかわりの中で育つものがある。保育者や子どもを取りまく大人はそのいずれかを考え、前者に属する時は一歩後退して見守らねばならないし、後者に属する場合には子どもが興味をもち、行なう喜びの中で自らの活動に対し意欲のもてるような方法を工夫して成長するよう暖かく見守らねばならないと思う。「音楽リズム」は後者に属する面が多いのでなからうか。

この表に出ている「わらべ歌」は大正の時代から今まで子どもの遊びにふさわしいものとして保育の場に行けられたものである。「わらべ歌」についての研究は特に十年來大きく広がって来て、幼児とのかかわりについては今もなお保育誌等を通して取りあげられている。しかしそのすべてが現在の子どもたちに迎えられるものでもないし、音楽の広い場面でこれが最高のものであるというものではないことは、その発生がいろいろの地方の独特の場で、しかもそれぞれ異なった年代に異なった社会環境の中で育って伝えられたものであることもわかる。しかし、いつの時代でも関係のあるものが過去を振り返って残す価値のあるものは、残す努力をしなければならないし、われわれの祖先が何を考

え、どんな心情で子どもの養育にあたったかを知るとは実に大切だと思ふ。言葉は心を表現するための財産であり、詩は心を表現する方法であるとするならば、「わらべ歌」には日本民族の親の愛情のこまやかさと、どの時代にも「わらべ歌」を通して感じられる子どもの遊びに対する思いやり等、読みつつ、歌いつつ、踊りつつ、強い感動を覚えるのである。流行の波に流されることなく子どもの遊びの実体を見つめて、その適当なものはさらに次の時代まで伝え、新しく子どもたちの作成になる「遊び歌」は大人の手で必要ならば残すための操作が必要であることも考えられる。

表1にはわずかな種類が出ているが、その前年同地区の祖父母を対象に「わらべ歌」の調査を行なった。学生が中心になって行なったために採譜等まで至らなかったのが大変残念である、また一部の幼稚園、保育園の父兄が対象であるので全体的な収集ではないが、学生が外部のみに目をむけ勝ちであることに對して何かの反省となり、身近な生活の中に「わらべ歌」のようなたぐいのものがまだいろいろ残っているの、それらは保育の場とつながって流れていることに気付くようになればよいとゼミの学生を励まして行なったことである。紙数の関係でわらべ歌の列挙のみにさせていただく。

わらべ歌の種類

(1) 動植物に関するもの

いもむしごろごろ、うさぎうさぎ、うちのうらのくろねこ、うめかさくらか、からすかんざぶろう、かりかり、こうもりごっこ、ことしのぼたん、こやまのうさぎ、くまさん、ほたるこい、コンコンさま

(2) 手あわせ歌

せつせつせ、おちやらかほい、お耳をからげて、お寺の花子さん、げんこつ山の、一本橋ちよこちよ、一かけ二かけ、うちのこんべとさん

(3) 絵かき歌

あひる、かえる、お姫さま、おじいさんのかお、たこ入道

(4) 縄とび歌

一羽のからす、大波小波、おつきおはいり、かりゅうどさん、くまさん、たわらのねずみ、波は、どんどん、郵便さん

(5) 天気気象

一番星見つけた、大寒小寒、お月さんいくつ、たこたこあがれ

(6) 手まり歌

いちぢくになじん、一番はじめは、一文目のいすけさん、

大黒さま、かぞえうた、正月かぞえうた、山寺のおしょ

さん

(7) 砂遊び

いちじくらんらん、字かくし、陣地とり、でこぼこくろちゃん、なかなかほい、乃木大将、棒たおし、むこう横

丁の

(8) お手玉

おじゃみおふう、おひとつおとして、ひいふうみいよう

(9) 歳時歌

せきのかた、どんどんやき、山の神さま、山の子は、山の譜、お正月

(10) 悪口歌

ひとのひかげに、ひろこひがつく

(11) 子守歌

なくないいこ、ねんねんよう

(12) 不明

一休さんが、うえみれば、まめだ

しかしこうして調べてみて、これらのものが子どもに伝わっていないことに驚いた。私たちの年代のものは、「わらべ歌」はほとんど肉親から習ったし、友だち同志集まって遊んで、自分の知らない歌が出ると帰って親に聞いた。また親たちは大方知っていて

教えることもできたように記憶している。時には知らないものがある子どもから習いもした。しかし今回の調査で驚いたことに子どもと大人の知るものにつながりが多いのは全くの予想外だった。子どもたちは他の大人から学んで、地方色少ない共通のものを遊びつつ知るより耳で聞いて、歌として歌う場面が多いのでなかるうか。NHKでも昭和三十七年、三十八年ごろから取り上げて放送されているし、幼児の時間には四十四年ごろからたびたび取り上げられて、昨年度等低年齢の子どもの興味をもつものがずいぶん取り上げられた。私も三十六年に「ほたる」を

輪唱させて民放に出演した記憶がある。なぜ「わらべ歌」を取りあげたかという点、全く現在のような状態とは異なっていて、この教材が保育教材の中にあつたし、幼児の歌唱については一つものをいろいろに扱って、たびたび歌わせることが音楽性を育てるための大切な条件であり、二重唱、輪唱のようなハーモニーの楽しさや美しさを感じさせることは、できれば幼児から経験させるとうよいと思つてゐた。当時外国から少年合唱団が二、三来日したり、玉川学園の幼児たちのコーラスの放送等もあつたので、それが誘因だったかもしれないが、音楽を好きにするのには歌が歌えるようにすることだと思ひ、その方法をいろいろ考へてゐたころだったので「わらべ歌」が輪唱教材として、特に幼児には同旋律が何度も発生し、三度の和音が現われる点で適当なものが多いの

で取りあげてゐた。近年テレビ放送で絵かき歌が取りあげられたからか、幼児の絵本等にも紹介があり現在なお「わらべ歌」は教材の中に相当取りあげられる要素が多い。それだから私たちの幼かつたころとは全く別な状態で伝承の場面に展開しているわけであるが、保育の面では子どもと教師のかかわりの中で行なわれることを考えると、その養成の場にある者としての責任を感じるわけである。そしてその遊びの場を親子共通のものに広げたいと願うのである。

II 家庭での音楽リズムに関する活動

保育の場ではまだ重要な役割を果している「音楽リズム」が、家庭生活ではどんな活動となつて再現され、遊びのかてになつてゐるかを知らため実状のよくわかつた数園に依頼した。これらの園は熱心なリーダーをもち、子どもたちの活動に対する扱ひも比較的いいと思われるし、子どもたちもその活動を楽しみ、積極的に楽しんでゐる。ただ調査の一部にある親の意識の中に、大人の技術に対する批判的な意識があつて、子どもの活動に対してそんな見つけがまだあることが子どもたちの家庭での活動をはばむという感じがしたことは残念であつた。

表Ⅱ 年長組 (325名)

歌	① 1 2 3 (38)			② 1 9 7 (60)			③ 5 (2)		
踊 る	テ	①49(15)	②69(21)	③ 5 (2)	①21(6)	②112(34)	③64(20)	① 0 ② 0	③ 5
	レ	49(100)	50(72)	0	12(57)	73(66)	0	① 0 ② 0	③ 5
	ビ	18 (38)	12(17)	0	5(24)	35(31)	0		
		39 (80)	26(37)	0	13(62)	65(59)	0		
楽 器		① 43 (35)	②67(54)	③ 3 (2)	①16(8)	②131(67)	③27(14)		
		④ 15 (12)	⑤14(11)	⑥ 4 (3)	④ 4(2)	⑤ 8(4)	⑥16(8)	② 2 (40)	③ 3 (10)
環 境	テ レ ビ(カラー, 白黒)			(135)			(140)		
	ラ ジ オ			(80)			(73)		
	ス テ レ オ			(65)			(55)		
	テーブコーダー(カセット)			(52)			(60)		
	ハ ー モ ニ カ			(100)			(100)		
	オ ル ガ ン			(53)			(62)		
	ビ ア ノ			(12)			(20)		
	電 子 オ ル ガ ン			(10)			(5)		
	ギ タ ー			(3)			(10)		
その他 ((13)			(10)			

数 字 人 数 () %

調査事項

(1) 遊びの媒介をする環境調査

テレビ、ラジオ(ステレオ)、テーブレコーダー(カセットテープ)、ピアノ、オルガン、ハーモニカ、電子オルガン、ギター、バイオリン、マンドリン、木琴、その他

(2) 活動の状況

歌う ①よく歌う ②時々歌う ③歌わない

踊る ①よく踊る ②時々踊る ③踊らない

④テレビを見ながら ⑤レコードを聞きながら ⑥歌を歌いながら

楽器 ①よく遊ぶ ②時々遊ぶ ③遊ばない

(3) よく歌う歌 ①ラジオやテレビの歌 ②幼稚園で歌う歌

(3) 調査人員 ①年長組 三二五名 ②年中

組 二六〇名 ③年少組 九四名

年中組 (260名)

歌		① 1 1 9 (46)			② 1 3 7 (53)			③ 4 (2)
踊 る	テ	①49(20)	②64(25)	③6(2)	①15(5)	②94(36)	③28(20)	0
	レ	28(57)	36(61)	0	8(50)	69(73)	0	0
	ビ	16(30)	16(30)	0	6(40)	27(29)	0	0
楽 器		①22(20)	②84(71)	③8(9)	①10(7)	②99(72)	③20(15)	②3(75)
		④11(9)	⑤3(3)	⑥5(4)	④14(10)	⑤5(3)	⑥1(2)	③1(25)
環 境	テ レ ビ(カラー、白黒)	(140)			(160)			(100)
	ラ ジ オ	(78)			(86)			(30)
	ス テ レ オ	(50)			(57)			0
	ハ ー モ ニ カ	(100)			(100)			(100)
	オ ル ガ ン	(37)			(54)			0
	ビ ア ノ	(17)			(24)			0
	電 子 オ ル ガ ン	(8)			(8)			0
	ギ タ ー	(3)			(8)			0
	その他(木琴、マンドリン)	(9)			(10)			0

数字人数()%

計六七七名

子どもたちの環境を重視して第一項目にあげたが表の作成の結果は下段になった。調査の内容と表の関係についていうと、よく歌う(第一グループ)、時々歌う(第二グループ)、歌わない(第三グループ)に分けてまとめ、そこから、踊る、楽器で遊ぶ、というふうにだんだん細かく分類した。歌唱の三グループに属する、よく踊る、時々踊るはどのグループに属するものも同じ部類の子どもたちである。よく歌うグループに属するものがよく踊ったり、よく楽器で遊ぶということが表の上に現われてやっばりという気持ちがあった。百分率は上段から順を追って価値の出し方が異なっている。学年人数は全体人数との関係であり、各グループのものは組人数に対する%であり、テレビ・レコード・うたを媒介として踊る場合は%はそのグループ人数に対する比である。紙数を少なくするために、できるだけ表を縮小したので、見る人に理解しにくいことをおわびする。環境の数は表を見やすくす

年少組 (94名)

歌	① 5 2 (57)			② 4 1 (41)			③ 1 (1)	
	①19(37)	②29(55)	③ 4(8)	① 3(7)	②29(71)	③ 9(20)	0	
踊 る	テ	15(80)	18(69)	0	① 2(66)	23(80)	0	
	レ	11(60)	9(32)	0	② 2(66)	11(40)	0	
	ビ	14(70)	15(50)	0	0	17(60)	0	
楽 器		①14(27)	②29(55)	③ 6(11)	① 1(2)	②29(71)	③ 8(2)	
		④ 0	⑤ 0	⑥ 3(6)	④ 0	⑤ 0	⑥ ③(7)	
環 境	テ	レ	ビ(カラー, 白黒)	(130)		(120)	(100)	
	ラ		ジ オ	(80)		(38)	(100)	
	ス	テ	レ オ	(45)		(36)	0	
	テー	プ	コー	ダー(カセット)	(8)		(18)	(100)
	ハ	ー	モ ニ カ	(65)		(65)	0	
	ピ		ア ノ	(12)		(10)	100	
	オ	ル	ガ ン	(36)		(40)	0	
	電	子	オ ル ガ ン	(4)		(5)	0	
	ギ		タ ー	(2)		(5)	0	
	そ		の 他	(20)		(10)	0	

数 字 人 数 () %

るために全部で現わした。表の結果からいうと、子どもたちが歌うことの多いものほど音楽に対する興味が強く、その結果が踊ることや、楽器遊びにまで広がっていくという結果が出たわけで、運動神経が鋭敏であればリズムミカルな動きができるということではないようである。この表は家庭の調査から出たものである。この表は家庭の調査から出たものであるとすると、一層歌唱の指導については考慮しなければならないし、保育科学生の声学については一層の研鑽をしなければならないと思う。子どもの歌唱能力が音楽、さらにはリズム活動が好ききらいの原因になることは、^{注IV}今までも書いたが、逆にいうならば身体のリズムミカルなくしては音楽の楽しい営みはないということであろうか。歌うことが上手というところにも一般にはソリストのイメージが多く、上等の音質をもったものを考える癖があり過ぎるように思われる。まず歌うことの楽しさが解るためには正しく歌う力を育てていくことであろう。作者の心は正

よく歌う歌 ベスト10

	年 長		年 中		年 少	
テレビ (ラジオの歌)	ウルトラマン	88	左に同じ	70	左に同じ	40
	仮面ライダー	82	仮面ライダー	56	ピンポンパン	36
	ピンポンパン	50	ムーミン	40	仮面ライダー	32
	ひみつのあっこちゃん	34	ピンポンパン	38	ムーミン	20
	ムーミン	32	帰ってきたウルトラマン	20	ミラーマン	18
	ミラーマン	27	ウルトラ7	14	ひみつのあっこちゃん	14
	帰ってきたウルトラマン	21	ミラーマン	14	テレビのうた	10
	テレビのうた	19	C.M.S	10	おぼけのQ太郎	10
	アタックNo.1	14	おぼけのQ太郎	10	C.M.S	9
	おぼけのQ太郎	14	アタックNo.1	10	みなし子ハッチ	8
幼稚園の歌	うれしいひなまつり	61	左に同じ	35	左に同じ	30
	うぐいす	19	チューリップ	20	左に同じ	18
	園歌	19	たき火	16	うぐいす	16
	気のいいあひる	11	園歌	16	左に同じ	16
	さんび歌	10	雪の小坊主	13	たき火	13
	たき火	9	キラキラ星	11	春よこい	10
	きれいな朝	7	左に同じ	9	日の丸	9
	仏様	7	誕生日のうた	9	手をたたきましょう	8
	数字のうた	7	うぐいす	7	さんび歌	8
	雪のペンキや	7	おさるのブランコ	6	朝の歌	7

しく歌ってこそ理解できて、楽しさも美しさも理解できるのである。目に見えない楽器である声帯を通して出す声は全く辛抱強い指導と愛情による以外育つ方法がない。また先生が正しく歌えることが前提になる。楽器を離れて正しく歌う力を育てないかぎり歌唱は大変不便なものになる。ハーモニカや笛等のメロディー楽器が大分多くなって来たので楽器によらないで範唱できるまで育ってほしいと思っている。その時こそ本当に子どもたちが遊びの中で歌ったり踊ったりできる時である。表の結果によると歌い一つ踊る子どもの数はいずれもグループでも五〇%を越えている。そんな「音楽リズム」の実施ができる時こそ子どもたちにとって楽しいものになると思う。楽器ではアコーディオンやギター等の携帯楽器が使用できることが幼児の「音楽リズム」の指導には必要だと思う。二歳三歳のころあんなに喜んで歌ったり、踊ったりする子どものあの姿をそのままの姿でつなぐためには「音楽リズム」を戸外に持ち出すことでは

なかるうか。室内で行なう音楽リズムは戸外でできないものや、戸外に出た時の予備になるようなものであると考えるならば、長時間の室内での営みはよほど避けることができると思う。子どもの「よく歌う歌」は調べて見ると、これだけ多くの歌がテレビの歌と合わせて歌われていることがわかった。人数の総計はテレビのよりも下回るが、表は一部省略したので現わさなかったが曲数はそれよりもさらに上回っていた。私はこれだけの歌を家庭にもちこんでいる実状を知って、これらの園の先生方の努力の賜だと思つた。テレビやラジオの歌は、物語りや画像に結びついている場合が多いが、幼稚園での歌は先生と子どもの人間的つながりの中で培われて歌われるもので成り立ちの全く異なるものである。前者が次々その物語の変わると共に間もなく消えて行く場合が多いのに比べて、後者は何度方法を変えてもあまり変化なく現われて、つくづくと教育の力に驚くのである。紙面の都合で割愛した曲数は三十曲あまりである。表には現われなかったが、第一グループや第二グループに曲名のないものが相当数あつた。中には「よく歌うが曲名がわからない」と書いてあつたが、私が子どもを幼稚園に出している時子どももの歌う曲の印刷をいただいていた。家庭で母親と子どもが再度歌うことを願つてのことだと思つた。保育者のこまやかな心づかいと努力によって保育の歌のいくつかは受けつがれているのかもしれない。楽器の項の④⑤は現在

特別指導を受けている数であるが、母親の何人かは幼児期に音楽性を育てたいとの願いを記していた。せっかく始めた勉強が続くような指導と、母親の協力が願いたい。とかくの批判はあるが音楽は幼児から積み重ねたものが一番育つし、子どもにとって決して迷惑な贈物でなく、できれば誰もが育て得られれば幸いである。学生の拳手による解答によれば「音楽が好き」という項は一割に満たないのに、「音楽ができる」とよい」という項については一〇〇%であつたことを見ても、幼児期の重要性は誰もが感じていた。幼児の音楽教育の指導者が少ないことよりも母親に現在ほとんどその力のないこともむしろかしい原因であると思う。それだけに幼児教育者にゆだねられた「音楽リズム」の勉強については研究を続けなければならぬと思うのである。正しい教育の中で育つ明るい人間性とリズムカルな身体が、生命のリズムにもつながることをもって努力したいと思うのである。

(市郷学園短期大学保育科)

注Ⅰ 保育学会昭和四三年発表『幼児の音楽教育と小学校教育

との関連』

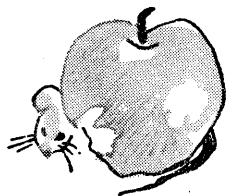
注Ⅱ 音楽教育と人間形成 マーシャル著 美田節子訳

注Ⅲ 保育学会発表『四歳児未満児と音楽リズム』

注Ⅳ 保育学会昭和三八年発表『幼児の声域』市郷学園短大人

文学紀要一一号『幼児と音楽』

ニューヨークから インドへ



石島 襄二

ニューヨーク在動中に「薬石効なく」二人目ができてしまいました。長男にひとりっ子の弊害が既に顕著となっておりましたから、下ができたことは大変結構だったので、なにしろ家内は、帝王切開でないとベビーを生めないという厄介な身体を持ち主なので、どうにも閉口しました。なにが閉口かというところはもちろん経済上の理由からです。当時アメリカでは、正常分娩で病院の諸経費七〇〇ドル（約二十五万二千円）というのが相場でしたが、帝王切開ともなるとその倍以上の一五〇〇ドル（約五十四万円）かかったのです。一ドル＝三百六十円という円切り上げ前のレートが厳然とまかり通っていた時代でしたし、収入の一・五倍に相当するこの時ならぬ出費はこたえました。その後ニューヨーク州で解禁となった妊娠中絶も当時まだご法度でしたから、高い手術代を払ってでも生むしかないのです。

日本に中絶に帰るといふ手もあるのですが、往復の航空券代が帝王切開の費用と丁度同額という皮肉さでした。銀行から追加のローンを仰ぐなど、無理算段した甲斐あってか、幸い二番目には元気な女兒に恵まれました。ついでながらこの時同じアパートにいた四人の日本の奥さんが相前後して出産、アメリカのバスポートをもったベビーを連れて帰国したのは何とも愉快でした。

育児に追われている中に、アッという間に二年半が経過し、お誕生近い長女を加えて親子四人、今度は太平洋を渡って帰国しましたが、帰国後数ヶ月でインドのニューデリー駐在を命ぜられました。ニューデリーには、大阪府教育委員会の肝いりで派遣されている、教育熱心な校長先生以下男ばかり六人の先生に生徒数十人、エア・コン付き教室に送迎スクール・バスという恵まれた日本人小学校があり、英、米、日の三ヶ国で腰の落着かない小学校生活を送って来た長男は、ここでやっと安住の地を得た感がありました。

一方、アメリカ時代ベビー・ベッドに何時間もほったらかしにされていた長女は、インドに来て専属のアヤ（乳母）があてがわれ、境遇が一変しました。境遇が一変したのは長女ばかりではありません。運転手兼皿洗い兼メッセンジャー・ボーイだった亭主も、女中兼コック兼洗濯女だった家内も一挙に格上げされ、バラ・サーブ（大旦那）、メン・サーブ（奥方様）と呼ばれ、召使いたちにかしずかれる身分となりました。といってもこれは我々が急に金持ちとなった訳でなく、国民の大多数が極度の貧困にあえぎ、失業率が異常に高いインドでは、労働力があり余っており、ウソのように安い賃金で多数の使用人が雇えるためです。もちろん使用人がもてるのは上流階級だけです。日本人を含め外国人は自動的に上

流階級に繰り込まれてしまうので、体面上どうしても、何人かの使用人を抱えることになります。

貧乏記者の私共でもコック、ペアラ（召使）、スイーパー（床掃除人）、運転手、ドビー（洗濯屋）、マリー（庭師）、それにアヤの計七人を使っていましたが、そのサラリーの合計が一〇〇〇ルピー（約四万八千円）に足らずという安直でした。この中住込みはコックだけでしたが、残りの使用人たちも、早朝出勤してから夜まで家に詰めていて、なにかと家事をやってくれるのですから、主婦にとつては「天国」です。もっともこの天国大変暑くて、四―五月の暑熱期には四二―四度に達し、日中冷房の無いクルマでは、熱風が吹き込むので、窓を閉め切って走る方がましというひどい高温になります。その上敗戦直後の日本をしのばせる物資不足で、世界のたいいの大都市で売っている日本食品も手に入らないし、人の顔さえ見れば物や金を欲しがっているインド人の気質も手伝って、日常生活面での苦勞もなかなかなものでした。

とはいっても家内は、結婚後十年にして初めて余暇を手に入れ、ゴルフや運転手付きの買物など、典型的なレジャー・マダム暮しを満喫して、すっかりご機嫌でした。朝起きればスイーパーの手で屋内の掃除は済んでおり、マリーが芝に水を撒く音を聞きながらコックの用意した朝食のテーブルに向

かうといった寸法です。七時半にはアヤが出動して来て娘を着変えさせ、日よけ帽子をかぶせて朝方の涼しい中に近所の公園に遊びに連れて行きます。公園には同じくアヤに手をひかれた白、黄、黒、茶などいろいろな肌色の幼児たちがやって来て、人種差別などどこ吹く風と入り乱れて遊び出します。その間にアヤたちは木陰で車座になって、やれどこのメンサーブがケチだの、あとこの家では昨晚、派手な夫婦ゲンカがあったのと世間話の花を咲かせる訳です。

アヤは概して中年の子持ち女が多く、長年外人家庭をわたり歩いて来たアヤの中にはカタコトの英語をあやつり、結構しつても敵しく、かけ出しのお母さんなど足もとにも及ばないようなしつかり者も見受けられました。

私共で雇ったアヤ、ラクシユミは娘が某商社員宅で同じくアヤをしているという、いわば母子相伝のアヤでした。インド南部のタミール生まれで鬼瓦のようなご面相でしたが気はいたって優しく、長女もよくなつきました。

長女がタミール語まじりのヒングリッシュ(インド式英語)という奇怪な言葉をしやべり出した二歳の秋に「タイニー・トット・スクール」というニューデリーでは指折りのナーゼリー・スクールに入園させました。これはごく当り前の幼稚園でしたが、白人の園長先生(女性)以下、ナントカP.Mに

出て来る真理アンスのような顔をした若い助手も大勢いて、なかなか行き届いた世話を午前八時から午後零時半まで見てくれました。兄と違って生れて以来人見知りということを知らない長女は、最初から結構楽しく通園していました。幼稚園にもアヤが二、三人いて下の面倒をみるので、自分で用を足せない子どもも預けられるのが取り柄でした。月謝は月一〇〇ルピー(約四千八百円)、飲み物は幼稚園持ちですがオヤツは持参でした。

二年半のインド暮しの間に家内が朝はゴルフ、午後は買い物、夜はパーティーという生活ですっかりスポイルされたのに対し、長男は一年の三分の二を泳いで暮したためすっかり水泳が得意となりましたし、長女はノビノビと物オジしない性格に育って呉れたのは、不幸中の幸いといえたかもしれせん。(OECDパブリックセンター)

最近、しばしば大きくことであるが、高層建築の住宅で、歩き始めの子どもが、とことと、ころびながら歩くと、階下の住人から文句をいわれるとのことである。歩き始めの子どもにとって、自分の足で歩くことは、生活のすべてといつてよいくらいである。それが、「しつけが悪い」と文句をいわれるのでは、親も子もたまらないだろう。歩くことすら安心してできなくなりつつあるのが、現代の子どもの環境である。子どもの周囲からは、子どもの生活と切り離すことのできない土や水や太陽が失われつつあるし、子どもの好きな、木の実拾いや、土をは

じつて小さな虫を見つける喜びは、手の届かないところについてしまっている。しかも朝から晩まで、おとなの目が子どもをしばっている。

こういう現代の環境の中で、幼稚園や保育園が果たす役割は、急激に変化している。幼児に、子どもらしい生活をとりますことこそ、幼児教育の機関がまず確

保せねばならぬことである。幼稚園に行けば、自分らしい生活ができるという安心感を子どもに与え、自分の生活をつくり上げることができるようになること。幼児が、どこかで子どもらしい生活ができなかつたら、人間が育つだろうか。現代の憂いである。

他方、幼稚園や保育園を見ると何と多くの問題があることだろう。巨大化し、組織化した幼稚園に、子どもは自分の選択なしに、入れられる。行くことを拒むと、登園拒否児とされ、教育的論議の対象とされる。幼児という小さなサラリーマン社会のようである。

幼稚園のための子どもではなく、子どものための幼稚園であることを、はっきりと、認識せねばならない時であると思う。せめて、幼稚園には、子どもが自分でつくり上げる生活が確保されていないか、現代の環境では人間が育たないかもしれないのである。

一九七四年の新年を迎える。(津守真)

幼児の教育 第七十三巻 第一号

一月号 © 定価一七〇円

昭和四十八年十二月二十五日印刷
昭和四十九年 一月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所 日本幼稚園協会

東京都港区三田五ノ二二ノ一
印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

© 本誌御購読についての御注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします



じゅうがちょう (特1) ……24枚 150円



じゅうがちょう (特2) ……24枚 150円



じゅうがちょう (特3) ……36枚 190円



じゅうがちょう (A1) ……24枚 120円



じゅうがちょう (A2) ……22枚 120円



じゅうがちょう (A3) ……24枚 120円

内容を一新した フレーベル館の新学期用品

自由画帖・製作帖は、子どもの表現力を伸ばす重要な教材です。フレーベル館の自由画帖、製作帖は、子どもたちのよいお友達になることを願って、編集しています。今年も美しいぬいぐるみの表紙で、自由画帖は9種類、製作帖は4種類用意しました。

- せいさくちょう (特A) ……ラセン綴 250円
- せいさくちょう (特1) ……ラセン綴 170円
- せいさくちょう (特2) ……ヒモ綴 170円
- せいさくちょう (A1) ……ラセン綴 150円



じゅうがちょう (F) ……50枚 200円



じゅうがちょう (A4) ……36枚 145円



じゅうがちょう (特A) ……22枚 190円

*くわしくは、フレーベル館代理店・支社・営業所または本社営業課 TEL 東京(03)292-7781(代)にお問い合わせください。



情操をゆたかにし創造力をのばす
キンダーブック ①-情操
 4月号“こいぬの ろくちゃん”
 多色刷 A4判 32頁 つばめのおうち
 こいのぼり 特別付録つき。
 団体購読価150円



観察の眼をそだて心情をゆたかにする
キンダーブック ②-観察
 4月号“はるを みつけた”多色
 刷 A4判 32頁 つばめのおうち
 こいのぼり 特別付録つき。
 団体購読価150円



科学する心をそだて自然に親しませる
キンダーブック ③-科学
 4月号“どうぶつのおやこ”“くら
 べる”多色刷 A4判 32頁 つばめ
 のおうち こいのぼり 特別付録つき。
 団体購読価150円



幼児の心を育てる
キンダーおはなしえほん
 4月号“五つのはなのえき”多色刷
 L判 32頁 こいのぼり 特別付録つき。
 団体購読価150円



園児をもつ母親のための専門誌
ホームキンダー-4
 4月号“おはなしえほん”
 特別付録つき
 園児をもつ母親のための専門誌
ホームキンダー
 L判 100頁 多色刷 特別付録つき。
 団体購読価150円